

第三回 教文研教育シンポジウム記録

高校教育の現在と未来を問う

—— 神奈川の入試制度等をめぐって ——



神奈川県教育文化研究所



シンポジスト

・浅井 良雄

(横須賀市立大津中学校教諭)

・竹田 邦明

(神奈川県立藤沢高等学校教諭)

・笥 璃恵子

(中学3年生の保護者・横須賀市在住)

・黒沢 惟昭

(神奈川県立大学教授)

コーディネーター

・広瀬 隆雄

(桜美林短期大学講師)

1993 年 2 月 27 日 (土)
於：逗子市図書館ホール

開会の言葉

○司会（谷口） では、定刻になりましたので、第三回神奈川県教育文化研究所主催「教育シンポジウム」を始めさせていただきます。

きょうは、まだ集まりぐあいがいまひとつなんですけれども、そのうち参加者が増えてくると思います。

土曜日の午後で、まだ花粉も多く飛んでおります中、どうもありがとうございます。

では、最初に主催者であります、当研究所の倉持所長から皆さんにごあいさついたします。

あいさつ

○倉持所長 皆さん、土曜日の午後、大変ご苦労さまでございます。

私は県教文研の倉持でございます。

もう既にご案内のように、全国的には高校の進学率も九五％に達しまして、大学進学率も四〇％に近づいていると、こういう中で、高等学校教育のゆがみと改革ということが強く叫ばれております。

「十五歳の春を泣かせない」という大変古い、古典的な言葉がありますが、その後、質的ないろいろな変化があったにしても、十五歳の春を泣く声というのはまだ町にかなり満ち満



ちているというふうに考えます。

「高校教育のゆがみ」、それから「子どもの心の抑圧」、「人間性疎外の実態」というのが、そこには問題をはらんで横たわっているというふうに考えられます。

現在の高校教育が抱えている問題点というのは、いろいろ言われておりますけれども、要約的に言つて、次の三点が指摘をされると思います。

一つは、進学率が九五%にも達して非常に多様な生徒が入ってくる。その生徒のニーズにこたえ切れない教育内容、あるいは制度、いわゆる画一的教育の問題が一つあると思います。

二つ目には、学校間格差、序列化の問題でございます。

三つ目には、偏差値進学、偏差値教育の問題。

この三つに要約をされるのではないかと考えます。

新聞・テレビなどでも大きく報道されておりますように、現在、社会問題化しております高校中退、あるいは業者テスト、障害者の進学問題、こういったものも、いずれもこの三つが絡んで発生している問題だと認識をいたしております。

神奈川県では、七三年から始まりました、いわゆる「高校新設百校計画」、これが八七年に達成をされておりますが、これは進学機会の確保という点ではかなり大きく評価をされる事業であるというふうに考えます。

しかし、学校間格差を生んできたというのもまた事実でありまして、その辺にいろいろな問題、課題が現在横たわっていると思います。

また、生徒の多様化への対応として、「特色ある学校づくり」ということが推進をされておりますけれども、これにもいろいろな問題をはらんでおります。

神奈川県の場合、高校入試に関係する問題として公立中学校で長年実施されてきた、いわゆるア・テスト（アーチブメント・テスト）、学習検査の問題があります。最近の一連の文部省の業者テスト排除の強い姿勢の中から、この神奈川のア・テストも廃止をされるんじゃないか。こういう声が県民の間はかなり広まっております。

これについては、県の教育長は、去る二十三日の定例県会で「現時点では廃止するということは考えていない」ということを言明しておりますけれども、いずれにしましても、今、こういうア・テスト問題も含めて、公立高校の入試制度等を再検討しております県の審議会、神奈川県高校教育課題研究協議会というのがありますが、これの最終答申が来年の三月に出される予定になっておりますが、こういういろいろな、かなり激動しているというか、進行している情勢の中で、この答申を三ヵ月早めて、ことしの十二月中には出したい。こういうような意向を教育長は漏らしております。

文部省の方は、高等学校教育の改革について、九一年の第十四期中教審の最終答申を受けまして、いろいろな施策を打ち出しておりますけれども、高校教育のあり方を検討してきた高校教育改革推進会議では去る十二日に「高等学校教育の改革の推進について」と題する第四次報告を提出をしました。

その報告では、高校の学科制度を現在の普通科、職業科の二本立てから、双方の科目を総合的に扱う総合学科を加えた三本立てとするということを提言をいたしております。

一方、教職員団体の方では、高校希望者全入、高校準義務制というような展望を踏まえながら、当面、定員内全員入学、学区の縮小、総合選抜制等を提起をして運動を進めているという状況でございます。

以上、かいつまんで、ごく要点的に高校教育の問題点とか、改革の方向に触れたことを申し上げます。

したが、いずれにしましても、高校教育改革の動きというのは、問題をはらみながらも、かなり大きなうねりを示してきているということが言えると思います。

本日は、神奈川の入試制度等を含めて、高校教育の改革をテーマにしたシンポジウムでございますが、それぞれ専門の立場、保護者の立場からのシンポジストのご意見を中心にして、参会の皆様から活発な意見の交流もお願いをいたしまして、実り多い会になりますように念願してやみません。どうもありがとうございます。（拍手）

シンポジウム

○司会 では、早速シンポジウムの方に入らせていただきます。

きょう、コーディネーターということで、専修大学の広瀬隆雄さんに司会進行役をお願いしております。

広瀬さんは、当研究所の研究評議員、そして教育相談員も務めております。では、広瀬さん、よろしく願います。



○広瀬（コーディネーター） きょうは、「高校教育の現在と未来を問う」というテーマをめぐって活発な討論をこれからしていきたいと思います。副題に「神奈川の入試制度等をめぐって」というように入試問題のテーマが載っておりますが、入試問題だけではなくて、今高校が抱えているさまざまな問題について、できるだけ幅広く話し合っていきたいと思います。

シンポジウムに入る前に、本日の大まかな段取りについて説明しておきます。

シンポジウムは大きく分けて前半と後半、二つの部分からなっています。まずシンポジストの方々に十五分から二十分程度お話をさせていただきます。ひととおり終ったら、休憩時間を取り、その後一時間ほどフロアの方々からの意見なども交えて議論をしていきたいと思っています。

それではトップバッターとして、横須賀の天津中学校の浅井さんの方から、高校問題、特に送り出す側の立場からいろいろとお話をさせていただきたいと思っています。よろしく願います。

○浅井（天津中教諭） ただいま紹介がありましたけれども、天津中学校に勤務しております浅井と申します。

司会の方から出口のところというところでまずトップバッターに指名されましたけれども、中学校に勤務して二十年を超えたわけですが、その中で私自身が感じてきたこと、それから体験してきたことを中心にお話できればと思っています。



私自身がかつて中学三年を受け持ったときに、これは誰でも体験するわけですが、三年生の後半、二学期から一人一人の子どもの進路を選択していくか。いわゆる進路指導というものが高校を選ぶ、それから就職、進学にするか選ぶ、そういう進路指導に入っていくわけです。その中でかな

り矛盾したこともやってきたわけですが、一番担任として感じていたのは、四十名の仲間たちが一年間一緒にクラスの中で生活をしてきて、最後の出口のところで小学校から中学校に来るように、中学校から高校へみんなと一緒に仲間とともにに行けないという現実だったわけです。四十人が、それぞれがばらばらに、私自身の言葉で言えば、切り離されて巣立っていく。そういう現実、中にはやはり涙を流しながら進路選択をしていった子どももいますし、さまざまな子どもたちの顔がよぎるわけですが、けれども、そんなところできょうのテーマである入試制度等をめぐってということでお話したいと思います。

文部省が戦後すぐ、一九四九年だったと思うんですが、高校における入試選抜はやむを得ない害悪であって、経済が復興して新制高校に学びたい者に適当な施設を用意することができるようになれば、直ちになくすべきものであるという方針を出しました。

ですから、日本のこれからの高校教育というのは、中学を卒業して、高校に行くときには入試はないんだ。すべての子どもが高校に行けるんだということが国家の方針だったわけです。当時は、施設の関係で高校の収容数がないということで「やむを得ず」という言葉を使って、入試選抜を行ってき

た。ところが、日本が復興していく中で、経済発展を遂げていく中で、その理念がいつの間にか、これははっきり一九五九年ごろだと思うんですが、法律が変わって、改悪されて入試選抜を行うと。特別な事情があるときは行わないことができる。今までは入試選抜をすることが特別だったわけですが、それからはしないことが特別という形で変わっていくわけです。そこからいわゆる適格者主義というのが生まれてくるわけですけれども、そのときに私自身がちょうどベビーブームの世代ですから、私たちのころは進学率はそんなに高くありませんでした。

今は、最初のあいさつの中でもありましたけれども、九〇%を超える時代になった。私たちにしてみれば、社会が発展して、高校の数もふえ、それなりに教育が進んでいけば、すべての子どもが希望すれば入れるんだという希望がずっとあったわけですが、現実には逆にどんどん入れなくさせられてきていっているということが言えると思います。

それで一番中学の担任をやっていて厳しかったのは、九〇%を超えと言いながらも、一つ一つの高校に格差があつて、その高校に行きたくてもいけないという現実が出てきている。それは学校間格差というふうに言われているわけですけども、もちろん学校間格差というのは受験学力といひますか、そういうところに基づくものでしかないと思ふんですけども、格差が生じた。

神奈川県も百校計画を進めるに当たつて、学区を確かに分割してきたわけです。今、県内は十八学区になっていますけれども、私がいるところは横須賀三浦学区。公立普通科高校が十二校という県内でも最大学区になっています。その中で十二校あれば十二のランクがあると言われるぐらい格差が生じてきている。

そうすると、四十人の仲間が、どうしても十二、それから職業高校、私立、就職、各種学校というところに振り分けられていくということが一番中学校の教師としてのつらいところだったと思います。

格差というのは社会のやむを得ない、もうなくせない、どうしようもないものか。高校入試選抜がある限りどうしようもないものかということでききますと、私自身は全国でいろんな取り組みを聞く中で、制度をつくれれば、格差をなくすことができるんだということを、この間実感をしています。そういう意味では今の神奈川の選抜制度は、単独選抜、一人の子がある高校を受けるといふ選抜制度、これを単独選抜というんですが、この制度についてはまた詳しく後でお話が出ると思ひますので、詳

しくは触れませんが、制度を変えれば格差のない、それこそ地域の地元の高校に通うことができるんだということを聞いて、何とかこの制度を神奈川の中でも導入できないかというところで、今考えているところです。

もう一つ、九〇%を超えて、今、最初のごあいさつの中で九五%進学率というふうに言いましたけれども、正しく言いますと、お手元に資料をお配りしたところなんですが、神奈川県は今現在九五%というのはまだなっていない。神奈川県で言えば、九四・何%、これも定時制を含めての九四・何%だと思うんですけども、それを全日制だけで見えますと、神奈川県は九一%台なわけです。これは全国的に言いますと、下から十番目ぐらいの数字になるわけです。四十七都道府県の中で神奈川県はかなり低い。

特に私が勤めております横須賀三浦学区では九〇%台という数字になっています。生徒が今どんどん減ってきていますから、政策的に希望するすべての子を受け入れようと思えば、今それだけの施設はあるわけです。これはどうしてこの数字でとどまっているかと言えば、政策的にこの数字にとどめさせているわけです。これを計画進学率と言っていますけれども、計画進学率をここにとどめさせている限り、どんなに高校に行きたいと頑張っても、全日制で言えば、九%の子どもにはどうにも行けない仕組みになっているというところが今一番の問題だろうというふうに思います。

それが例えば私の学区の中にも「障害」を持った子どもが高校に行きたい、みんなと一緒に地域の高校に行きたいということを願っても、この壁の中ではばまれている。そういう意味ではまず一つは、この計画進学率を人為的に定めることについて、私自身は疑問に思っています。

今、県教委の方でこの計画進学率を引き上げるような形で検討を進めていると言いますが、今の進め方でいったならば、「希望するすべての」というところにどうもいかない。やっぱりどこか

線を引いてしまうということが言えるのではないかなと思います。

それをどこまで引き上げていくか。それから希望するすべての子どもたちを受け入れる条件を整えたときに、今のままの選抜制度だったら、それはまたすべての格差の中で子どもたちが振り分けられていくわけですから、格差のない制度をどうつくり上げていくかということが、今本当は県教育委員会に一番求められているのではないかなと思います。

ところが、文部省からのさまざまな政策提言の中で、どうもそれとは違う方向で、もつともつと子どもたちを振り分けていく。例えば単位制高校というものをつくったり、コース制、いわゆる外国語コースとか、芸術科コースとか、体育科コースとか、そういうコースごとに分かれてつくっていく。ますます子どもたちが振り分けられていく。地域の高校へ通えない状況になっていくということが今一番恐れているところです。

そういうところで私たち中学の教師が手をこまねいて、制度があるからしやうがないと言っている限りは、結局は教師自身が子どもたちを振り分ける加害者にならざるを得ない。子どもから見れば、どんなに中学校の中で仲間づくりだとか、それからみんなで団結して頑張ろうとか、クラスづくりだとかやっていっても、最後の出口のところで結局は成績によって振り分けられていく限り、それは教師としては振り分ける下手人といえますか、加害者として子どもから見られざるを得ないということに中学校の教師は置かれていると思います。

私自身は、三浦半島地区教職員組合というところに所属しておりますけれども、せめて制度が変わらない限り、私たち自身が何ができるのかということ、この間取り組んできたことをちょっとご報告したいと思います。

それは、やはりお手元の資料の中に、「地域の高校へ進学しよう」というパンフレットが一枚あると

思うんですけれども、毎年、これを一学期に全中学三年生の保護者に子どもの手を通して配っています。十数年これをやってきたわけですが、私どもの運動として、三浦半島は先ほど言いましたけれども、十二校というかなり大きな学区ですので、それをまず三つに分割するという案を考えました。

その三つの案に基づいて近くの高校に行こうと。できるだけ遠い高校はやめようということで運動をしてきています。今の制度がある中で、教師一人一人のところにいかかわってきますから、大変厳しい運動なんで、そういう意味では何年かかってもすべての子どもが地域の高校へ行かれるようなところまでいついていませんけれども、徐々に徐々にではあっても何とか地域のところに行こうと、そうやって格差をなくしていこうということができるといふうには思います。

ちなみに今年度も中学三年生の全在籍生徒数の二〇%以上は地域の高校三校ということを指定して、そこに通わせようということで取り組んできました。二〇%という数字は大変低いと思われるかもしれませんが、全在籍数の二〇%ですから、今、公立普通高校に行ける生徒が五五%ぐらいまで下がってきているんですね。これはかつては六〇%を超えていたわけですが、生徒が急減していく中で私立高校の定員は減らさないままできていますから、公立高校の定員を減らしてきたということで、今、公立普通高校に五五%ぐらいの子どものしか行けません。その中の二〇%ということですから、それなりにかんりの数字ではないかというふうに思っています。

そういう中で今年度まだ結果は出ていませんから、あくまでも志望者ということで、受験をした生徒というところでいきますと、三浦半島学区の中で三十四の中学校がありますけれども、二十六校から二十七校の中学が二〇%以上地域の高校三校に希望をしている。それから特に三〇%を超える中学校も七、八校あります。一番多い中学校は地域の高校三校に三七%ぐらい集中して受験をしています。その三七%というのは、先ほどの公立普通高校に行ける五五%の生徒の中では七〇%近くになるわけ

です。ですから、一つの中学校の中で公立普通高校に行く生徒の中で、七〇%近い子は地域の三校の高校に行っているというふうに言えると思います。

これを一步一歩努力しながら、教師の進路指導といえますか、そういう中で子どもたちに訴えていきながら、保護者にも訴えていきながら進めてまいりたいと考えております。

今の現実の中で大変厳しい運動だとは思っていますけれども、息長く続けることで、少しずつでも一気にはいかなければ、格差というのはなくしていけるのではないかなというふうに思います。

その中で中学校のクラスの中でということで、これは私自身の体験でしか言えませんけれども、私が中学校三年生の担任を持ったまず四月に子どもたちにこう言います。「最後にみんなで進路公開ができる学級にしよう」。これは私が中学三年生の担任になったときの最初に子どもたちに呼びかける言葉です。つまり、進路公開をやろうということではなくて、進路公開ができる学級にしよう。その学級を目指して頑張ろうというふうに言うわけですが、「進路公開」というのは、子どもたちが希望を出して、志願書を出していくときに、まずクラスの中で自分はどこを受けるということを一人一人が発表し合って、それをクラスの人みんなで考えるということだと思います。

それを一学期に一回、二学期に一回、三学期に一回ということ、一学期段階は子どもたちの希望もまだ定まってきたいけませんから、「俺は何とか高校に行きたいな」という子もいれば、「俺はやっぱりこのまんまじゃ多分高校に行けないから就職かな」とか、そんな形で話がいくわけですが、二学期の十二月になりますと、もうかなり絞られてくる中で、それは一人一人が発表する中では、ときには涙を流しながら、「俺は本当は昼間の高校に行きたかったけれども、先生から無理だと言われた。だから、しょうがないから定時制に通いながら塗装工になるんだ」とか、そんなことをみんなの前で発表していくわけです。

そういう中でクラスの子どもたちが、例えば高校に行けなかった子や、それからのことをどう考えていくか。逆に言えば、自分はなぜその高校を選んだのかというのを問われてくる。そこで、選んだ理由がただ単に大学進学にいいからとか、親が行けと言ったからという理由では、クラスの仲間関係の中で通用しなくなっていく。やっぱり自分がなぜその高校を選んだのかということを真剣に考えざるを得ないという進路公開をやるわけです。

それで、すべての子どもが地域の高校へ行こうというところにまだいかないわけですが、それを聞いている教師として非常につらいわけです。結果的には先ほど言いましたけれども、「俺、先生にだめだと言われたから行けないんだ」という話が出てきますから、これはもうまさに私の方が問われているんだなと思わざるを得ません。そういう意味では制度がある中ではありながら、一步一步まず現場の私たち一人一人が何ができるかということを、今一度、今この時期に考えながら進めていくこともできるのではないかと思います。

最後になりますけれども、今、業者テストが盛んに文部省から、もう禁止命令まで出たぐらいに言われていますけれども、少なくとも横須賀では業者テストをやっている学校は少なかったわけですが、上からとか、制度からとか、そういうところで変わることによって教師が変わるということが、今までの通常だったというふうに思うんです。今これからは自分たちでどう変えていくか。自分たちで何ができるか。制度や上からのということを待つんではなくて、自分の学級の中で、自分の学校の中でそれから大きく組織、教職員組合としてというふうにつくっていくことが大事なんだなとつくづく思います。

今、三浦半島教組で一番取り組んでいる課題として、「障害」児の高校入学ということが一つあります。それもやっとここ数年取り組み出しました。まだまだ壁は厚いわけですし、受け入れてくれる高

校の方も定員内不合格という形で、「これだけの定員はとりますよ」という県民に対する約束をしておきながら、結果的には定員の中で落としているという、もちろん高校の教職員組合の努力もありながら、定員内不合格を出さないという取り組みもしている中ですが、まだまだ現実はそのような壁がありますし、もっと言えば、高校の生徒一人一人の中で掛け算九九もできない子がなぜ高校に来るんだとか、それから足し算・引き算ができない子がなぜ高校に来るんだというところの壁も大きくあります。そこを中学、高校と反目し合っているのではなくて、もっともつとお互いが本音を出し合うような討論を深めながら、高校って何なのかということから出発していけないかなというふうに考えています。

もちろん私たち自身の取り組みによることばかりですので、大変厳しいですし、そういう意味では教師の自分自身の存在も問われるわけですけども、文部省が今さまざまな高校教育改革なんということを打ち出している中で、一步一步でも私たちの側から進められればというふうに思っています。

ちよつと時間が過ぎたかもしれませんが、私としての話をさせていただきました。（拍手）

○広瀬　ありがとうございます。

送り出す側からの問題提起という形で話をいただきました。高校の格差の問題、具体的には計画進学率の問題、それによって子どもたちが振り分けられて、行きたい子どもが高校へ行けないという問題。それからあと組合としての取り組みとか、中三の担任としての取り組みなどについて話していただきました。

さて次は、受け入れる側からの問題提起をしていただきたいと思います。藤沢高校の竹田さんです。お願いします。



○竹田（藤沢高教諭） 藤沢高校の竹田です。

今、中学校の浅井先生の方から話がありましたが、そこを若干受けるような形で高等学校の問題について話をしてみたいと思います。

「高校教育改革」という言い方が今いふところでは言われているわけですが、でも、これまで私も含めて日教組というところに結集し、運動してきましたが、戦後の教育改革運動の歴史の中で、日教組の主張というのが通った歴史はほとんど皆無に近いというふうに言えると思います。

すなわち私たちがやろうとしている教育改革というのは、制度改革としてはなかなか位置づかないならば私たちは現場を持っているわけだから、この現場の中でできる教育改革というのは何なのかというところ。ここに展望が出てくるのではないか、そういう意味で少し話をしてみたいと思います。

高校教育改革問題として考えると、人口論、すなわち入選、選抜の問題と、それから高校教育の中身の問題と、こうあるかと思いますが、初めに入選の問題をちよつと考えてみたいと思います。神奈川の高等学校というのは、今、浅井先生の方からありましたように、大きな特徴は何かというと、これは何回も言葉が出てきましたが、「学校間格差」というところにあります。

この「学校間格差」の例というのをどういうふうに話をすればいいかということです。高等学校の先生方はもちろんわかっていてるわけですが、例えばある学校へ私が行ったときに、その学校の授業の風景を見ますと、先生の方を向いているのは十人ぐらい。残りの三十人ぐらいは横を向いたり、後ろを向いたり、物を食べたりしている。授業中だけど、外でキャッチボール、廊下で紙でキャッチボールをやっている子がいる。これは極端な例として聞いていただければいいと思うんですが、冬になると教室にこたつが持ち込まれる。八人ぐらいがこたつに足を突っ込んで授業を聞いている。

パカパカパカッと音がするから何かなと思うと、コーヒーが沸いている。これは現実にある授業風景の一シーンですね。

こういう学校から、先生がしゃべれば、せき払い一つせずには授業が成り立つという言い方をしますけれども、スムーズに進んでいくという学校と、こう極端な例としてあるわけですね。

この「学校間格差」、百六十五校県立高校がありますけれども、こういう「学校間格差」の中で今神奈川の高校教育というのがなされているというふうに言えると思います。

この「学校間格差」はどのようにしてつくり出されてくるかというと、入試の中できれいにスライスされた結果、できてくるということになります。私の住んでいる湘南学区で言うならば、県立普通高校としては十一校ありますけれども、入試の点数で見ると、大体十点から十二・十三点刻みでスライスされていきます。そうすると、これは一科目当たり二点から三点、漢字一つか二つ。きょう理科の採点の何か新聞に出ていましたけれども、あれは一個二点ですから、一科目当たりその二点で学校が一つ変わる。実はそのぐらいの中身なんだけれども、それが完全にいくと、今言ったような状況の違いというのが出てくる。

そしてもう一つ高校中退問題というのがありますが、高校中退問題で言うならば、神奈川は昨年四千人を少し切った。教育委は減ったと言って喜んでいましたけれども、実際には子ども数が減っているわけですから四千人の中退で、神奈川の特徴というのは、その率自体は全国的に言って決して高くありませんが、特定の学校に集中しているところにあるわけです。一校で百名以上の中退者が出る。四十人学級実現という運動をやってきましたが、とくに四十人学級はできているというような学校が幾つかある。これを私たちは「課題集中校問題」、全国的に言くと「教育困難校問題」というふうに言いますけれども、「課題集中校問題」ということで取り組んでできているわけですが、要は入

選問題、選抜制度の問題、高校教育改革問題を考えていくときに、この「学校間格差」をなくしていく方向で考えていくのか。それとも「学校間格差」は、これはもうしょうがない、一昨年の四月の中等教育審議会は「学校間格差」はしょうがないと言っているわけですね。日本の教育において、いい役割も果たしてきたと言っているわけですね。それは何かといったら、みんなが高校に行ける。みんなが高校卒業になったと。そういういい役割があったんだと、こういうふうに言っているわけですね。この「学校間格差」をなくすのか、温存していつて、より正確、より公平に輪切りをしていくのかというところで、もう議論の立て方が違ってきちゃうわけですね。

今、ア・テストを入れるか入れないかというふうに言っていますが、「学校間格差」を残したままア・テストを入選として使うのか使わないのかという議論をしたとしても、それは「高校教育改革」という視点から言えば余り大きな意味を持たない。それは中学生の受験負担という点での議論にとどまっています、高等学校教育のあり方そのものについての改革の議論にはつながっていかないだろうというふうに私は思います。

ですから、高校間格差を解消していこうというふうにするならば、これは「学校間格差」がなぜ残っているかを見なければなりません。それは「学校間格差」に対する幻想があるわけですね。すなわち一つの価値をそこに見出すわけですから、例えば大学進学というのを一つの価値基準に置くならば大学進学というのを考えると、「学校間格差」で分けて、大学進学の可能性のある子はそういう子どもたちだけ集めて、より効率的に勉強させれば、いい大学に行くだろう。こういう幻想があるわけですね。それは幻想だというのは黒沢先生が教育総研の本の中で全国状況から分析していらつしやいます。それはまた皆さんいつか読んでいただくとして、決してそんなことはありませんよということを、大学進学という一つの問題をとったとしてもありませんよということを黒沢先生はおっしゃっている

わけですが、そういう「学校間格差」の幻想を打ち破れるかどうかということはありますけれども、この「学校間格差」というのを解消する方向をとるのかどうかという議論が一致できるかどうかが一つの大きな課題だろうと思います。

私は、もう今、九十何%という進学率になっているということを考えれば、これは「学校間格差」をなくしていくという方向で進んでいくべきだ。すなわち高校教育改革というのを「子どもたち」というところを視点にして考えれば、当然そういう結論を出さなきゃいけないだろうというふうに思っているところです。

もう一つ、高等学校というところを、この議論をしていくときに、「適格者主義」という言葉がありました。適格者主義という立場に立つか、希望者全入という立場に立つか。義務制という言い方もありますけれども、義務制だと小・中と一緒に、みんな必ず行かなきゃならないと、こうなるわけですが、そこはとりあえず置いておいて、希望者全入という立場に立つか、適格者主義という立場に立つかということで、答えの出し方、これまた変わってくると思うんです。

この適格者主義というのは九一%全日制。実質上は九二%近く実績としてはありますけれども、この九一・九二%という全日制、その他定・通合わせて九五・九六%という中で適格者主義を言っても、これは実は実際上は意味は持たない。適格者主義という中で切る口実というのを与えているわけですが、実際には例えば四十五人学級だったら入れたけれども、四十四人学級になっちゃったから入れなかったと。「四十五人だったからおまえは適格者だったんだけど、四十四人だから適格者じゃない」。こういう論理は成り立たないわけですから、そういう点で言うと、もう今や適格者主義というのは破綻しているはずなんだけれども、現実には私たちは教職員の意識も含めて残っていると言わざるを得ないわけです。



この適格者主義ということに基づけば、これは先ほど言ったことと同じになりますが、どのように公平に、どのように正確に、どのように正しく適格者を選ぶかという議論になるわけですね。希望者全入という立場に立てば、これまた違うやり方がいろいろ出てくるだろうというふうに思います。

私は自分の教えているクラスで、藤沢高校は女子ばかりですが、四十数名の生徒にどういうふうに入学選抜試験、高校入試というのはあったらいいかと質問しました。昨年の九月のことなのですが、もう生徒は簡単に言いますね。「抽選」ですね、「抽選」。希望校を三校書く。その三校の中から抽選でやっていくということですね。これはほとんど全員一致して抽選方式ですね。

朝日新聞の記者にその話をしたら非常におもしろがっていましたけれども、記事にはならなかったところですね。希望者全入に立てば、これはいろんな入選方法というのが生み出せるというふうに思います。それは小学区制というふうに言う場合もあるだろうし、総合選抜というふうに言う場合もあるだろう

し、抽選方式という場合もあるだろうし、要は前提として希望者全入に置くのか。何%という数字を切った適格者主義に置くのか。そこをどうするのかというところに論議としてはあるだろうと思います。

私自身の気持ち、考え方というのは、もうこれは希望者全入でいくべきだ。進学率は、これは上がるのか、下がるのかわかりません。結果的に、例えば生涯学習体系ということが今言われていますが、高等学校のあり方として、そういうものの一環として、位置づけるといっても一つだとするならば、これは進学率が必ずしも上がるとは限らない。スウェーデンなんかの例を見れば、いつとき進学率は下がりますね。また学びたいときに高校へ来る。こういう形になるわけですから、進学率自体は問題にならないというふうになると思います。

ただ、これは一つの大きな制度改革になりますから、なかなか進まないということになります。希望者全入、抽選方式というふうに私がここで幾ら言っても、今の高課研の中でそういう結論が出るかと言え、これは出ないですね。

そうすると、先ほどこちよつと言いましたが、我々が現場の中でできる、最低できるのは何かと言え、今できるのは、この「学校間格差」をなくしていく一つの方法、希望者全入に近づけていく一つの方法として定員内不合格を出さないということですね。

実は、今こういうことを言うとかちよつと怒られちゃうかもしれませんが、三浦半島地域ではない、県の地図を書くとかちよつと対角線に位置するような地域では、「この生徒はとらなくていいですから受けさせてください」と。こういう話は現実にあるんですね。それは例えばスライスをし、この学校A高校はこの点数、B高校はこの点数。こうなったときに本来中学校側としてはB高校を勧めたい。しかし、その本人が家が近いからとか、またいろんな事情でA高校を受けたい。こういったと

きに、A高校に受かったら中学の進路指導というのはやりにくくなっちゃうわけですね。だから、「落としてもいいですよ」ということを現実言ってくる。こういう事例があるわけですね。

高校側はどうするか。その生徒を受け入れちゃう。受け入れちゃえば、これは「学校間格差」が構造として少し変わってくるきっかけになりますよね。こういうことをやってみることは我々自身でできるわけです。

こういうふうにはまず定員内不合格を出さないというような方向を我々自身がつくり上げていくことは、そしてその中から「学校間格差」というものを崩しかけていくということは、我々自身の運動の中でできるのではないかと、いうふうに考えているわけです。

これは私たち自身の、教職員自身が持っている適格者主義だとか、そういうものについて問いかけていくことになり、それから、なかなかそう簡単に進まないかもしれないけれども、そういうところを一つ取り組んでみるというふうに考えているわけです。

今度は少し高等学校教育の中身の方に入りたいと思います。『あるべき高校像』ということをとのよに考えるかということですが、『あるべき高校像』を高校教師だけで考えていたら、これはろくなものにならないというふうに思います。

高等学校というのは、先ほどからも「地域に開かれた」云々という言葉がありました、教育を教職員集団だけでつくっているということは、これは決していい方向には進まないだろうし、親なり、地域なり、きょうは学者先生方もいらっしゃっていますから、そういう方々との知恵の出し合いというふうになるんだろうと思います。

ちよつと古くなりますけれども、臨教審というのがかつてありました。このきっかけになったのが、中曾根さんが言う「戦後政治の総決算」。教育で言うと、この臨教審が「戦後民主教育の総決算」にな

るわけです。

戦後民主教育というのは一体何だったんだろう。これは大学の研究者がいろいろおやりになっているところでしょうが、私自身としてどうとらえているかというと、一つは憲法の問題があると思います。戦後民主教育のよかった点というのは何なのか。この「憲法」というところに柱があったということだろうと思います。

今、ご承知のようにさまざまな動きが出てきている。これはみんな改憲の動きにつながっていく。教育の面で言いますと、戦後民主教育の柱と言われていたのはホームルーム活動、生徒の自治的な活動ですね。それともう一つは社会科です。これを見事に解体しました。社会科の解体というのは、学習指導要領で変わり、免許法で変わり、というふうになり社会科はもう完全に解体をした。

もう一つはホームルームの解体。すなわち生徒の自治的活動を解体する。この生徒の自治的活動を解体するというのが単位制高校という姿になってあらわれてきていると、私は思います。

この単位制高校は生徒の自治的活動というのがなくて、ただ単に単位をそろえればいい。単位をそろえれば高等学校卒業という資格を与える。こういう姿として出てきているといえます。

これはとりもなおさず今の日本の平和憲法体制を教育の面から崩していく一つの動きと言えます。ならば、我々はもう一回そこに足を置いてみて、そしてそこで今の高等学校教育のあり方というのをもう一回つくってみる。こういう姿を追求しなきゃいけないんじゃないか。

単位制高校の問題や、コース制の問題というのがいろいろ出てきていますし、総合学科というのも出てきました。実はこれは臨教審のもう一つの姿である「安上がり教育」、民活化というようなところとつながってきている話だろうと思います。

ここは黒沢先生と意見がぶつかるところかもしれないけれども、例えばさまざまなところでの技

能連携等の問題や、他の教育機関、学習機関における単位の認定の問題というのがありますけれども、これは行政が金をつぎ込まないということから出てくる一つの姿というふうな面で押さえておく必要があるだろうと思います。

もちろん我々がその部分を使って、新しい高校教育像をつくり上げていく、一つのやり方にするという、そういう運動の形態としては必要だろうというふうに思っていますが、今いった点はきちつと私としては抑えておきたいと思っています。

いずれにしても制度の問題というのがあるわけですが、もう一つ教職員の意識という問題、そして親や社会の意識の問題があります。その中心に子どもが置かれてなきやいけないということは、これは当然言わずもがなのことですが、私たち教職員自身がなかなかそこに目がいけないという弱点を持っており、率直に反省をせざるを得ないと考えています。

では、高等学校の、先ほど言った単位制高校や、総合学科というような中で、どういうところを我々としてはとらえていけるのかという点で言いますと、高等学校は現在、卒業単位としては八十単位という言い方をしています。八十単位そろえれば卒業できる。しかし、各学校では八十単位で卒業できるといふ姿にはなかなかなっていない。例えば私は生物の教員ですが、私の生物を落としてもその他で八十単位になればいいわけですから、二学期の途中から私の授業をやめちゃうかもしれない。これは私にとってみると大変つらい。途中で生徒の数が減ってしまったり、もういいやということで投げ出されてしまったり、これはなかなかつらい。

そういう点で言うと、高等学校側が素直に「八十単位そろえればいいですよ」というふうに子どもたちに言い切れていない。ところが、文部省の方は積極的に八十単位で卒業できるような弾力的な高校像というような言い方をしている、我々はそれに負けています。そういうところは積極的に検討し

ていくところだろうというふうに思います。

それから総合学科なり、コース制なりというような言い方で出てきていますが、私たちはそこで言っている大幅な自由選択制、そこは積極的に我々としては使っていけるだろう。ただし、県教育委員会がその方針に基づいて、総合学科高校なり、新しいタイプの高校なりをどんどんつくるかと言えば、新構想高校を一枚つくるのに今までつくってきた高校の四校、五校分の金がかかるわけですから、恐らく一枚しかつくりませんね。

総合学科構想というのをどういうふうにするかわかりませんが、同じでしょう。そうになると、特定の学校だけに金が注ぎこまれて、他の百六十五校の多くは置いていかれる。百六十五校が抱えているさまざまな問題点については金をかけないで、そういうところだけに金をかけていく。こうなっていく可能性があるので、私たちは危険視をしているということです。今言った、大幅な自由選択制、それがいいというならば、既設百六十五校で大幅な選択制ができるような条件整備、こういうものを我々としては追求をすべきだというふうに考えているところです。

時間が来ましたから、また後ほど後半の部分で若干補強できる場所があれば、補強させてもらいたいと思います。

以上です。(拍手)

○広瀬　ありがとうございます。大きく分けて二つほどの問題点が指摘されました。

一つは、高校間格差の問題、あるいは適格者主義が希望者全入の立場をとるかという問題です。もう一つは、今いろいろな新しいタイプの高校が続々とつくられているが、そういった動きをどのようにとらえるかという問題です。

次は、保護者の立場から高校問題について、お話をしていただきたいと思います。

中学三年生のお子さんをもつ寛さん、よろしく願います。

○寛（中三保護者） 寛です。



私は働いている母親です。我が家には女の子が一人おりまして、ことし高校受験しました。三日に発表ということで何も手につかないという状況にあります。

といいますのは、大変お休みが多かったし、勉強が余り好きではなかった。その二つの条件で母親としても、父親としても非常に心配な状況にあります。

何でお休みが多かったかといいますと、仲のよいお友だちがお休みが多かった関係で、一緒にお休みしていて、私自身「学校というものは行くべきもんでしょう。だから、行きなさい」と言いますんですが、「つまらないもんね」ということが表面的な言葉としては出てきています。そのお友だちは、学校へは行かずにわが家へ来てうちの子とCDやビデオでロックをきいてる。そのあげく高校へは行かない、美容師になる。と言いますが真剣さはみじんもありません。

いずれにしましても父親と母親としては、今おっしゃられましたように、九十何%高校に進学する時代だし、高校に進学させられない経済状態でもないんだから行ってほしい。中学を卒業して、自分の人生を決めるのではなくて、高校を卒業してから自分の人生を決めてもいいんじゃないかと父親が言って、それを納得して高校を受験したという状況にありまして、大変今心配しております。

それはそれとしまして、私自身の教育全般に対する考え方は、教育のプロでいらつしやる先生方とは全く違ってしまして、要するにいろいろな学校間格差とか、受験の制度とか、あるいは塾とか、そういう存在があるのは、そもその元凶は大学受験にあるんだと思ひまして、大学受験がなくなればいいというのが私自身の考え方なんです。

いろんな大学があつて、それぞれの大学が特徴を持って、指導力のある大学の先生がいらつしやれ

ば、子どもはどこの大学へ行きたいかということを自分で選択して、そこに無試験で入れていただいて、そこで本当に勉強して、勉強すれば卒業できる。勉強しなければ卒業できない。それでいいのではないかという気がするんです。そして高校は中学と同じように、学区をきめて、そこへ皆で行くことにする。そうすれば高校受験で、私の子どもとは違って、とても勉強をなさるお子さんのお母さんが、「本当はあそこへ行きたいんだけど、輪切りをされてしまってあそこへ行けないんだと言ってぐずぐずしているんですよ」とおっしゃることもなくなる。お母さんが言うのは「ア・テストのときに頑張らなかつたんだからしょうがないでしょう」ところが、ア・テストというものは、中学の勉強は小学校の勉強とは違うんだという認識がようやくできかけてきた頃に、またまたちがつた勉強のしかたを強要するから、先生も子供も親もふりまわされてしまい、にもかかわらず、大多数の子供達は要領が悪いから塾がのさばり、選別のためのベルトコンベアにのせられてしまう。

そういうことがあるのは結局大学受験が一番いけないんだから、大学は全部入れてほしい。そうすれば、大学の先生も怠けていらつしやる先生とか、あとは医学部ですと余りよくないことをなさる先生とか、そういう先生とかはなくなるのではないかといいふうな考え方を持っています。

それから小学校のときにうちの子どもを教えてくださった先生の中に、自由勉強の時間というものを持つてくださった先生がございました。私は大変それはいいと思つていたんですが、お母さん方に評判がよくありませんでした。「あの先生に持つてもらうと成績が落ちるからだめなんだよね」「あの先生は学校からいなくなるといういね」というふうな、ちよつと違うんじゃないかなあと感じたことがあります。

それと同時にうちの子どもの場合、「つまらないし、わかんないもの」ということから、私自身は今の中学の先生に一生懸命やつてくださいと申し上げたいけれどちよつと申しわけないんじゃないかな

とも思っています。

つまり、むしろそれは小学校の先生がきちんと教えていくのであれば、中学校へ行ってそんなことはないんじゃないかなと考えたんですが、「待てよ。小学校の先生にそれを押しつけるのも無理ではないか」教科書は子供の発達にあわせて作られているのだろうか。指導要領はどうなんだろうと、その辺が疑問になりまして、小学校の先生も、中学校の先生も、高校の先生も、何とも攻撃的にはしきれないという、そういう状況になってしまっています。でもやっぱり子どもが勉強していいと気になりますし、働いている母親としては、一生懸命教えてやるということもできません。子どもが小学校に入るあたりで、長洲さんが希望する子供は全部行けるように高校を新設するということをおっしゃりながら、高校をたくさんおつくりになっていらしたので、余り勉強、勉強と言わないできました。うちの子どもは何かこちょこちょ書くのが好きですから色鉛筆、絵の具、紙だのを十分与えて、それを教育費だと思っておりましたが、塾にやるという教育費は使つてこなかった。中学生になってから塾に行きましたが、時すでに遅しでした。そしていま子どもが高校受験になったら、希望する子どもが全部ではなくて、何人か落ちるような仕組みになっているというのを聞いて、もはや何ともできない。遅かったな。もっと早くからそれじゃハッパをかければよかったなと今思っても、どうも間に合わないという状況です。

ただ、そういう子どもではありませんけれども、私と子どもの会話はいつも成立していますから、ある日突然社会の中で脱落していくような子どもではないという確信はあります。勉強はしていませんし、好きではありませんし、できません。そういう状況の中でお招きをいただいて、こんなお話をしているのかと思ひながら、これで終わらせていただきます。(拍手)

○広瀬 ありがとうございます。

受験競争の一番大きな原因は大学受験の存在であるということで、大学受験をなくした方がいい。それからあと、お子さんについてふだんは余り勉強をしないお子さんの受験を通して、高校受験が全員入れないという状況を初めて切実に身にしみて感じたというような事柄についてお話ししていただきます。

次は、最後になります。今まで三人のシンポジストの方々の話を受けて感じたことでもいいし、それから現在高校をめぐるという問題が大きな焦点になっているのかといった一般的なことについて、神奈川大の黒沢さんの方からお話をいただきたいと思います。

○黒沢（神奈川大教授） 黒沢です。よろしくお願ひします。

只今、コーディネーターの方から、今までの話を受けてということですから、私も、うまく受けられるかどうかわかりませんし、違った意見も言いそうなので、その点、ご了承ください。



まず第一に、文部省が次々といろんな改革を出しておりますね。本日のテーマに即して言いますと、高等学校の改革が次々と出されています。一体これはどういうことを意味しているんだろうか、私もちょっとわかりかねていいます。わかっている人がいたら教えていただきたいんですが、ただ、ある研究会で、新聞社の論説委員だった方がやや揶揄的に言われたことをちょっと紹介します。

一つは、生涯学習時代になりまして、学校教育、社会教育も含めてですけど、文部省の権限が低下しました。そういうことが一つあると思うんです。ほかの省がどんどん権限を取っていったのです。臨教審が出きたときにも、文部省が一番対応がくれた省なんだそうですね。

それからもう一つは、日教組の方の変化に対する文部省の関係もあるんじゃないだろうかというこ

意見でした。今まで日教組がいい意味でも、悪い意味でも——と言っては恐縮ですが——戦闘的で、それを何とか「退治」しなきゃいけない。そこに文部省の存在価値の一部があったんですけれども、日教組の方が今「参加・提言」というふうにスローガンを変えてきましたので、何かそれに対して出さないと文部省の存在価値がなくなってしまうのではないかと考えて、いろいろな提言を出しているのではないかとこの意見なんです。私もそういう状況の変化はあるんだろうと考えております。

特に最近「業者テスト」に対する強い批判を文部省が出しました。これは私の今考えていることかと言いますと、非常に注目すべきことじゃないかと思うんです。それについて批判もありますが、鳩山文部大臣が「鳩の一声」かなんかで批判をする、それによってかなり現場がいろいろ動いている状況がありますね。あれはスタンドプレーじゃないかなんて言われたんですが、今度は少し違うと思います。つい最近新しい文部大臣がまたかなりしつこく言い出しているということは、どういうことを意味しているんだろうかな、と私自身考えているところです。果たして本気で偏差値の教育体制というものを打破することを文部省は考えているんだろうか。もしそうだとすれば、私はそれなりに歓迎したいと思います。まさに「参加・提言」という文脈からいえば、我々なんかも一緒に考えるような状況が出てきているんじゃないだろうか。ちょっと甘いかもしれませんが、そんなふうな感じがします。

それで、今偏差値の問題を申し上げましたけれども、この偏差値というのは非常に悪いものだとか批判する人がいますけれども、なかなか深い根がありまして、簡単にだめだと言っていたんではなくならないだろうと思います。私が考えますには、今日の日本の国家を、あるいは社会をどういうふうに規定したらいいだろうかといいますと、いろんな説明があるかと思いますが、経済学者の分析を援用させていただきますと、「企業国家」とか、「企業社会」という規定が説得的です。

今、筧さんが大学の問題を出されましたけれども、その背景には社会、端的に就職の問題がありまして、それを支えているのは日本の「企業国家」だろうと思います。その企業国家のことを詳しく述べる時間がないんですが、私の調べたところでは、企業の、特に大企業が要求している資質が、まさにこの偏差値によってつくられる人材養成と非常に整合性があるのではないだろうかこう思うのです。私の用意しました「レジュメ」を御覧下さい。

簡単に言えば、大企業が求めているのはフレキシビリティと申しますか、色々な事態にうまく適合するような人材を求めているのだと思うんです。あることに、ある技能にだけ有能である必要はなくてもいいんです。むしろさまざまな状況にうまく適合できるジェネラリティといいますが、そういう資質を企業は一番求めているんですね。「フレキシビリティ」という言葉が適切と思いますが、それがまさに偏差値を上げるといふ小さいころからの学力の向上と非常にマッチしているということです。

例えば一つの例として東大の合格者を取りましょう。これは一つの象徴的な例ですけども、ふつうの程度の才能のひとが東大に入れたということは、小さいときからコツコツと不得意科目をなくす努力をしているんですね。家庭の文化的、経済的な力（環境）も重要です。そして困難を乗り越える本人の頑張り、これも大切ですね。それを可能にする体力も含めて。そしてついに目的を完遂したという、その自信。そういったものを一番大企業では求めているのではないのでしょうか。

こういう関連が事実としてあるだろうと思うんです。だから、日本を支えているのは企業国家であって、しかも、その大企業が求めている人材と、偏差値によって形成されてきた人材がマッチしているとすれば、これは簡単に変えられないだろうというふうに私は思うんですね。

文部省がそれと違ったやり方を今出そうとしている（「業者テスト廃止」）のはどういう意味があ

るんだろとかということ、私としてはまだ説明できていないので、もしきょうの討論の中で解明されれば、非常にありがたいと思うんですが。とにかく今そういう状況がありますから、偏差値体制というものは簡単にはいかないでしょう。

しかし、この偏差値体制の中で、どういう教育の病状が出てきているかということをしるべきだと思います。これは大ざっぱに言えば、一方に少数のエリートと、片方に非常に多くのノンエリート。この定義もなかなか難しいんですけども、二極分解が起きていると、こう思うんですね。もちろんエリート、リーダーは必要だと思いますけれども、このエリートは小さいときから偏差値の競争に耐えてきた人々ですから、エリート以外の人々について無関心、無自覚な面があると思います。

つまり、一方にノンエリートの大群がいて、どんな思いをしているかということはほとんどわからないのです。わかってもしないと思います。ですから、それほどに自分が傲慢である、あるいは冷淡であるということさえもわからないのです。私も二年ぐらい前でですけども、東大の学部と大学院に講義に行ったことがありますけれども、本当に教えやすい学生が多いですね。わりかしおとなしくてよく勉強して、そして家庭環境もなかなかいいらしいんですね。ですから教師としてはある面では楽なんですけれども、そういう人たちの心の中には、果たして、例えば高等学校の、先ほど竹田さんがちょっと言われた課題集中校なんかで苦しんでいるような、そういう状況について全然わからないだろうと思うんですね。

一部の私の例だけでは申しわけありませんけれども、図式的に言いますと、非常に傲慢な、傲慢ということもわからないようなエリート志向の若者と、それから一方には分限意識ですか、「どうせ俺はこのぐらいいんだ」という、偏差値によって配分された多くの人々、そこではあきらめとシラケが一般的です。こういう状況が出ているのではないのでしょうか。

次にやや具体的に申しましょう。まず偏差値向上運動があります。これは神奈川の場合には受験産業が近くに多くありますから、それほど目立たないかもしれませんが、鹿児島なんかに行って聞いてきましたところ、ものすごい状況です。公立高校で朝から夜まで、夜までとは言いませんが、夕方まで、ほとんど半強制的に学力向上運動という名の偏差値教育が行われているんですね。

この間、ある資料を研究会で見せてもらいましたけれども、これは熊本でも、沖縄でも一般的に行われているとして、どういうふうに勉強すれば学力が上がるか、偏差値が上がるかというノウハウが職員会なんかで閲覧されているんです。しかも、「補習授業」という名の学力向上運動に二日休めば保護者を呼び出すということです。やりたい人がやっているんならそれはまあいいと思うんですけれども、全員、ほとんど強制的にやっているんですね。しかも、かなり支持している層がいるわけですね。だから、わりかし安心してできるという状況なんです。そこで人権意識とか、そういうような問題が希薄です。締め



つけがあるんで不登校もふえています。それから教員のオーバークなどが問題になっているというのを聞いてまいりました。

二番目には、進学校のもう一つの極には「課題集中校」、神奈川県ではこう呼ぶんだそうですけれども、いわゆる「底辺校」とか、「教育困難校」と言われている現状。これはもう今さら私が言うまでもなくて、普通の意味の授業がほとんど成り立たないのですね。しかも地域からはきられて、教師もなるべくそんなところへ行きたくないという状況ですね。それから家庭的にも非常に授業料滞納が多い。こういうような報告を受けております。だから、授業、地域、家庭、教師からも疎外されているといえますか、こういう実情です。

三番目は、高校進学が九五%に上がっていますから、ほんのわずかな中卒者に対する、言われなき差別ですね。本当は中学卒業の学力で充分な職業についても、今ではほとんどが高卒以上の学力を要求している条件がありますね。これはむしろ学力を求めるといふより、今これだけ進学が上がっているときに高校に行かないというのは何かおかしいのではないだろうか。問題があるんじゃないだろうかといういわれなき偏見からきているのだと、私は思います。

四番目は太学についてです。今寛さんの方から出ましたので、後でちよつと自分のことを言わなきゃいけないのであれですけども、少なくとも文科系に関しては「レジャーランド化」しています。これは大企業が自分のOJTと言われる企業内の技能訓練で間に合っていますから、大学はいわばウィスキーかワインみたいに寝かしておく時間だ。熟成を待っている時間なんだ。こう言っているわけです。もしそうでなければ企業は高等学校から直接採ってしまえばいいわけです。これはある教育学者が言ったのですが、「なるほどな」と思いました。

最後は、地域格差というものが非常に拡大し広がっていることです。神奈川のような大都会では考

えられないような離島僻地、山間僻地の教育が今も現存しておりまして、そこでは色々な格差のなかで教育が行われています。

以上の「病状」はやっぱり偏差値体制に起因します。その背景には大企業があるわけですね。こういう構造があるだろうと思うんです。ですから、これを何とか変えていくという運動を起こしていくことと並行して教育改革というのはやっていかないと、教育のただでやれなんて言たって、これは無理だろうと思うんですね。それはやらないよりはいいでしょうけれども。

これについてどういうふうにやったらいいのかという妙案は、今持ち合わせはありません。これがあれば今ごろこういうところで話をしているあればないだろうと思うんですけれども(笑)、やっぱり何か考えなきゃいけないと思います。

それでは企業は万々歳だろうかというところ、必ずしもそうではありません。経済学者なんかの分析によると、日本の大企業の共同社会、同質性というのは、大企業の正社員、しかも、男子社員に限られた非常に差別のある社会であって、そこからはじき出された、特に「主婦」と言われている女性に対する抑圧といいますか、負担をかける限りで保たれているのです。

そこから「市民社会」の喪失をともなっています。健全な地域活動がほとんどできない。大企業の人々はほとんど出てこないじゃないですか、地域活動の場に。それから政治運動とか、主権者としての活動領域がほとんど失われて、いわば企業の中にのめり込んでいるという状況があるわけですね。

ほかに国際摩擦いろいろな批判が出ていることは周知のところですよ。

それから市民生活だけではなくて、家庭内の中でも対話がなかなかできない。今離婚すると、退職金が入らないから定年まで待っていて、そして「はい、さよなら」とパートナーからいわれる。定年離婚ですか、そういう家庭がかなり大企業の中でかなり問題になってきているんですね。こういう状

況があるから企業は必ずしも万々歳ではないのです。

そういうわけで大企業の、日本の企業王国を支えてきた、プラスの要因が今やマイナスに転化しつつあるということが、企業国家を変えていく、そしてそれによって教育改革も並行していく一つの可能性があるんじゃないだろうかと思っています。

ちよつと話が教育改革から外れておりますけれども、レジメに書いたのは、私が常日ごろ考えている改革の焦点で、これは今お三人の方が話されたことと若干関連するかと思いますので申し添えます。一つは、下手をすると、格差をそのまま認めちゃうようなことになるかも知りません。そういう恐れがありますけれども、各国を見ますと、例えばドイツの教育などは十歳ぐらいから、いわゆる「選別」していきますよね。職業を選んでいく人と、それから大学に行く人の選別が十歳ぐらいの段階で一まずやっていっちゃうんですね。それがいいかどうかは別としまして、日本のように全部が普通高校へ行つて、それから大学へ行くことを目標とするような、そういう傾向は果たしていいんだろうか考えてみる必要があります。その前提上に組み立てられたライフスタイルを批判的にとらえなおして、教育改革というものを考える必要があるんじゃないでしょうか。

生涯学習というのはいろいろの批判もありますけれども、そういう意味から生涯学習なんかも考えていく必要があるだろうというのが、私の基本的なスタンスなんです。

もうちよつとスローガンの言いますと、エリートは確かに必要だろうと思うんですよね。しかし、それを傲慢なエリートにしないで、チェックする必要があります。そのためにはどういうことが必要かというと、ノンエリートが自立して、自覚的なノンエリートになっていくことだと思います。そういう改革の方向というものは出せないだろうかというふうに私は考えているんです。

もうちよつとはつきり言っちゃうと、今、大学の進学がふえています。これはこのまま七割、八割

になるとはちょっと思えないんですね。私の考えではですね。やはり六割ぐらいは高校を出て就職していくわけですから、そういう人々がシラケた気持ちに、悲しい分限意識にならないような何かそういう改革はできないだろうか。こういうふうに思っております。

なぜこういう状況が起こってきたかという、日本は戦後になつて階層の平準化というのが非常に進んだと思うんですね。少なくとも誰でもが中流になれるという、幻想が非常に強いわけです。幻想という言葉はちょっときついかもしれませんが、少なくとも意識としては、階層の平準化という傾向はやはりあるんですね。現実の職業としてはそれはないんですね。やっぱり恵まれた職業が非常に少なく、圧倒的に余りよくない、分のよくない職業がピラミッド型に現存しているわけです。

この職業への配分を戦後の社会は公平にしなきゃいけないということになりました。公平の方法は何かということが問題です。そして戦前のように身分制にはできませんから偏差値によって行う。そしてこれは一定の支持を得ているわけですね。こちら辺に大きな問題があるだろうと思うんです。

すまみせん、あと二分ですか、ポイントだけお話しします。私は、やっぱり格差の是正については、中学区規模の総合選抜制の実現ということを従来から申し上げております。小学区が理想かもしれませんが、かえって地域のいろんな格差が出てきちゃうんじゃないだろうかということです。

それからこれは先ほど浅井先生がおっしゃったように、制度ができるまで待つというんじゃないで、地元高校に進学する運動をすすめるながら、しかも、中学と高等学校を切り離さないで、中・高一貫制の中等教育を自主的につくっていく運動をやったかどうかというふうに考えているわけです。これが一つ、制度的なことですね。

もう一つは、カリキュラムです。今、必修が三十五単位ぐらいですかね。それ以外が選択ですから、

それをもうちょっと組みかえて、さっき言った、ライフスタイルを批判するような、そういうことに転換できる可能性はないでしょうか。そんなふうに考えているわけです。

例えば社会的な「弱い」立場の人の弱者に対する共感を生み、増大していくようなカリキュラムがつくれないでしょうか。ボランティア活動とか、場合によっては企業の実習とか、この高等学校を出れば、どういふところへ就職できるかということとをありのままに示して、そしてどういふ職業につけるのかもキチンと示す。そしてその職業の現実はどうなっているのか。その労働組合はどうなっているのか。そういうことを全部知った上で、本当にあなたはそこへ行くのか。そういうようなことをきちっとやるような、そういうカリキュラム編成というのはできないだろうかというふうに思います。

最後に、先ほど生涯教育のことを言いましたが、高等学校を三年に限定する必要性はないんじゃないかと、私は従来から思っているんですね。スウェーデンなんかでやっている、アダルトライフ・セッション、成人教育化ということです。極端に言ったら、生涯にわたっていいじゃないか。行きたいときに行って、そういうようなりカレントシステムをつくってやれば、中退者はなくなつて、「単位未修得者」というふうになつていくんじゃないでしょうか。これはちょっとユートピア的ですけども、そういうことも考えていいんじゃないかなと思います。

時間がオーバーしてしましまして、申しわけございません。(拍手)

○広瀬 ありがとうございます。

ただいまの黒沢さんの問題提起は、文部省が偏差値教育の打破ということとでいろいろ取り組んでいるけれども、本当なのかどうか。そして本当に偏差値というのはなくすることができなのか。黒沢さんは大企業の人材要求との関連で、なくならないだろうと指摘されました。それから教育の病理の問題あるいは改革の方向性についていくつか指摘がありました。

四人のシンポジストの方々にいろいろとお話をさせていただきましたが、まだまだ時間が足りないと思います。シンポジウムの後半ではフロアからのいろいろな質疑応答などを交えて、足りない部分を補足していききたいと思います。

とりあえず今から五分間休憩とり、三時三十分から開始することにします。

—— 休 憩 ——

○広瀬 これから後半部分に入っていきたいと思います。前半では四人のシンポジストの方々の話を伺ったわけですが、フロアの方から、四人の方々に對する質問でも、あるいはご意見でも構いませんから、何かあれば積極的に出していただきたいと思っています。

質 疑 応 答

○——（保護者） 私は、いわゆる点の取れない子どもの親なんですけれども、五年前に高教組の執行委員長の方と、点の取れない子でも高校に入りたいという話をしました。そのとき「その話は五年早い。五年たてば状況は変わってくる」といわれました。私の子どもは今年五度目の受験をしました。が、どのように状況が変わったでしょうか。いまだに入れてはおりません。

そして全日制高校は定員割れでも、やはり昨年もまだ落とされているという状況が続いております。五年前に「五年たったら何とかなる」というお話を私はずっと耳の中で覚えているんですが、その後の取り組みについてお聞かせいただきたい。

それから黒沢先生のお話を先ほどから聞いておりましたが、黒沢先生の中には、高校進学者という中に障害を持った子どもたちのことが入っていないんじゃないか。ボランティアで、何ですか、先ほどちらっとおっしゃったのは、弱者へのボランティア活動、企業実習というお話をなさったけれども、弱者はボランティアで接することなど何も望んでいません。当たり前前に生きるというところで、やはり高校も、大学ももちろんですが、当然受け入れてくれる高校に行くべきだと思っています。

黒沢先生にはいっぱいお話ししたいことがあります、とりあえずそれだけです。

○ 広瀬 わかりました。五年後に入れるという確約は高教組の委員長との間の確約ですか。

○ — (保護者) 確約というか、五年前に、この子を高校に入れたいと言ったときに。

○ 広瀬 話した相手というのは高教組の執行委員長ですね。

○ — (保護者) はい。委員長が言ったんです。

○ 広瀬 きょうは執行委員長の方はいらっしゃってないようですので、——竹田さん、申しわけないですけれども、高教組関係ということで、もしも答えられればお願いします。

○ 竹田 一般論を言い出すと、ちょっと長くなっちゃうんですけれども、ことし三月の中学卒業生、約十万人ですね。その中で一％の子どもが中学校の障害児学級及び養護学校(盲・ろう・養護)の中学部ですね。ですから、約千人ぐらいですね。ということは一％、一％の子どもたちが中学の障害児学級、いわゆる七十五条学級と、養護学校等中学部卒業、こういう数字になっているんですが、ことし例えば藤沢養護の小学校一年生の入学は〇というふうに聞いているんですね。全県平均すると、養護学校等の在籍率が神奈川は〇・六幾つですね。ということは、だんだん養護学校等の在学者数が減ってきていると、こういう数字ですね。そうすると、それは恐らく小・中の段階では普通級へ入ってきている。こういう流れですから、これから先のことを考えれば、小学校、中学校では障害を持って

いる子どもたちが当たり前前に普通級に入っていく姿というのが事実としてはだんだん出てくる。

そこで、その次の段階としては、当然養護学校等の高等部という道もちろんありますけれども、一緒に学んできたんだから一緒に高校へと、そして地域の高校へと、こういう動きになってくるというのが流れだろうと思いますね。

うちの執行委員長が何と言ったかは私はわかりません。それは私が責任を持って答えられないわけですので、高教組としてどう取り組んでいるかというところ、きょう、私は肩書は藤沢高校教諭になっているんですが、それは教育研究所の配属で、藤沢高校教諭という立場と、高等学校教職員組合の立場とありますが、今言ったそういう流れというんですかね、そういう事実を踏まえながら、私たち教組としては希望者全入という視点を運動の方向性として持っていて、当面定員内不合格というのをまっす出さないという考え方、そこには障害者を含むのか否か、ということになります。執行部、私たちの考え方は障害者を含んで、そういう考え方をしています。

現実的に、今、神奈川においては全日制普通科等々を中心に、定員内で合格できるという姿はまだ生み出し得ていない。だから、五年間たつて実態としてどこが変わったかと言えば、定時制への進学ということは確かにふえてきたけれども、全日制を希望しているという、そこから希望が始まるわけですから、そういう姿から言えば不十分ということです。ことしの結果については三日と、こういうふうになります。

○——（保護者） 今回の面で、結果については。

○竹田 私は答えられませんね。選抜をしていませんから。

○広瀬 よろしいですか。何かあれば。

○——（保護者） 例えば、何回受けたら、優先的にとるとか、そういうことはどうですか。本人の

希望と意欲という点では何度も挑戦するというのは、本人にとつては大変な希望と意欲だと思うんですけれども、その辺についてはどうですか。

○広瀬 きょうは竹田さんは高教組の代表という形ではなくて、一高校の教師という形で出ていただいているわけで、答えづらい面もあると思います。

浅井さんの方で、三浦の地区でもかなりこういった障害児の高校進学問題について積極的に取り組んでいるという情報があるわけですが、その点に関して浅井さんの方から何かありませんか。

○浅井 先ほどの中でもちよつと触れましたけれども、三浦半島の教職員組合としても取り組み出したと言えるほどのものではないんですけれども、ほんと、ここ三年なんです。

それもやっぱり保護者、子どもの希望というものをどうやって生かしているのかということから始まったわけで、私たち自身が主体的に「さあ、こうやって取り組んでいこう」ということできたわけじゃなくて、むしろ保護者、子どもの希望をどうやって受けとめるかということから、それこそ模索していったわけです。

少なくとも今組織的には、まず三年生の一学期段階から、親や子どもの希望をまず優先しようと。担任教師の方から、「養護学校へ行ったらどうですか」とか、そういう形じゃなくて、どういう希望を持っているのか。その希望を全部集約をして、私どもの方の組織で障害児教育部というところがあるわけですが、その障害児教育部で集約をして、そこで当該の中学校、それから受験を希望する当該高校と話しながら、これは教育委員会も含めてですけれども、市立高校を希望する場合は横須賀市の教育委員会になりますけれども、教育委員会も含めてどうやって条件整備をし、逆に言えば、合格した場合の中での体制をどうつくっていくかということを進めてきたわけです。

ただ、これも定員内不合格をまず出さないようにしようというぐらゐの取り組みでしかないわけで

すね。ですから、個々の高校の現場の先生の職員会議、さまざまなそういう中で議論を経て決定できるもので、私どもとして定員内不合格を出すとか、教育委員会の方からかなり定員内不合格を出さないようにという指導はさせていますけれども、現場の先生の方の主体的判断になっているという現状です。

ただ、ここ三年間の中で定員内不合格は市立高校で言えば、かつてはかなりあったわけですが、なくしてきている。ただ、今年度も、来年度もさあどうなるかということについては、一年、一年、そのとき、そのときという中で、まだ組合員全員で、教職員全員で積極的に意思統一なり、そういう合意が形成されているわけではないというのが率直なところだと思います。

○広瀬 それからもう一点質問がありました。黒沢さんに対して、いわゆる高校進学者、大学進学者の中に障害者の考えが入っていないのではないか。あるいは弱者はボランティアへとという考え方、これはおかしいのではないか。障害者、あるいは弱者も当



たり前に普通に生きたいんだというようなご質問がありました。これについてお願いします。

○黒沢 中学区規模の総合選抜制というのは差し当たったての手段で、私は全員入学させるのが一番いいと思います。入学試験といのはいろいろいくつあって、一長一短でして、希望する人はまず入れちゃったかどうかと思います。それからいろんなことを考えればいいじゃないですか。もちろん障害者も含めて希望する人は全員入れるということです。

ただ、今全国的情況を見ますと、なかなかそういう状況になっていないわけですね。むしろ大学区の方に移行しつつあるような現状です。まず差し当たって、中学区規模の総合選抜制によって比較的人格差がなくなるのですからこれを一つの共闘の方途として、運動を進めていったらどうかという事なんです。

それから、私の大学でII部の夜間の方に障害者の人が一人入って私の授業に出ていたことがありますが。私は社会教育の担当で、ちょっとどういうふうにやっていいのかわからなくて戸惑ったことがあります。その学生は手は不自由なんですけれども、足で答案を書いていました。それから今は少しずつ設備もできたんですけれども、当時は、随分前のことで殆どないんです。校門まではお母さんが車で連れてきてくれるんですが、あとは職員みんなで背負って教室へ連れてくる。そういうなかで私はいろんなことを学ばせていただきました。障害者が一人が入ってくることによって、色々なことを反省させられました。自分の話がいかにか抽象的なのか、声が小さいかということも含めて。

一番私が困ったのは、社会教育には実習というのがあるんですよ。「青年の家」なんかに行って研修合宿するんですけれども、そういうときにどうしたらいいんだろかというので、困ったなと思ったのです。本人は「ぜひ行きたい」というので、いろいろ学生に聞いたら、結構ボランティアで障害者と一緒にやっている学生がいて、「そんなの先生、心配することないですよ」ということで、そして一

緒に行きました。男の人だったんですけれども、一緒に風呂も入って、背中を流し合ったりして、そして私の方がかえっていろんなことを心配しすぎていたことがわかりました。結果的には杞憂に終わったのです。そういうことがあるんで、私もちょっと自己批判しなきゃいけないんですけれども、もつとごく普通に小さいときから、そういう人々と接するチャンスがあれば、私のように余計な心配をしなくてもいいんだということを、私、そのとき考えた次第です。

もう一つは、私の持論ですが、学校というのはなるべく軽くした方がいいということを繰り返し言っているんです。今まで余計なものもいろいろ学校内に囲い込み過ぎています。それで近代学校はかなり効率を上げたわけですが、今やそれが行き詰まっている状況ではないだろうかと考えています。

だから、できるだけ原点に戻したらどうかということですが。これは一挙にできませんから、まず差し当たって四十単位なら四十単位の選択科目を、社会の場に戻していくにはどうしたらよいだろうかということですね。社会の実務とか、体験との連携が考えられます。これは産学共同とか、いろいろ批判もあると思います。基本的にはそういうものと単位の代替によって、そのほか家庭の育児とか、そういうことも含めて、やったらどうかだろうか考えますがどうでしょうか。

それから私の大学の学生の中にいますけれども、お年寄りの介護で非常に苦しんでいたけれども、だんだんそういう回を重ねるにつれて、いろんなことが、今までわからないことがわかってきて、「共生」という意味が、言葉だけではなくてわかってきたというレポートの報告がありました。学校を軽くした分をそういうものと代替していくことが考えられます。さらに単位に組み込んでいくことによって、いろんな社会の実態がわかってくるんじゃないだろうかという意味で申し上げたわけですから、とりあえずそんなことです。

○広瀬 障害者の進学問題というのは非常に大きな問題だと思います。

障害者だけではなくて、いわゆる不登校の子どもたち、それから外国人労働者の子どもたちの高校進学をどう保障していくか。この問題は「高校とは何か」という根本的な問いかけにもつながってくる、非常に大きな課題になると思います。

ほかに何かあれば手を挙げていただきたいと思います。お願いします。

○小野寺（保土ヶ谷高教諭） 保土ヶ谷高校の教員をやっております小野寺と申しますが、一応分会員でもありますので、竹田書記長に対して非常に失礼なことを言うかもしれないんですが、まずあさつてうちの学校では卒業式があるんですが、「日の丸」が揚がるか揚がらないかということで、非常に分会の組織が崩壊するかどうかという瀬戸際のところにあります。これをまず知っておいてください。それからもう一点は、先ほどから竹田書記長の話から、格差をなくすためには現場で教職員が定員内では必ず生徒をとれといいますが、そういうことをやっていると、全く逆に学校間格差を残したまま定員内で受けた者は全員とていけということを言えば、必ず教員の方に差別感情というのが生まれてくるんですよ。つまり、生徒指導的に大変になってきたということを、各教員がかなり盛んに言います。

どうして大変になったかということ、ちょっと私、竹田先生のように口がうまくないんでうまく話せませんが、格差を残したまま、甘んじて非常に生活指導的に難しい生徒を受け入れろということをする限りは、絶対差別感情というのが教員の中に生まれてくるんですよ。組合の方で、分会の方で、そういうのを定員内で何とか不合格にはするなということを言うのと、組合は苦勞ばかり強いような組合で、こんな組合はやっていられないということになる、最近総合科をやれとか文部省から来ていますが、日教組というのは教育の自立性を守ってきたわけですよ。守ってきたんですが、そうい

うことから分会そのものに離反していく教員集団が、県教委から言ってくるコース制や、あるいは総合科なんていうことを導入することも来ると思うんですよ。分会のわからないところで既にそういう動きがあります。

あさつての「日の丸」の件でも、かなり組織が崩壊しそうな状況にあります。そういう中で竹田書記長の定員内不合格者を出さないというようなだけでは、格差そのものをなくすることはできない。現場だけが我慢を強いられて、そのままいけば格差をなくすることができるといふことを言っている限りは、組織崩壊ということが今後どんどん日教組レベルで起こるのではないか。

ここはそういう場所でないからそういうことを言ってもしょうがないと思うんですが、そういうことで黒沢先生や、浅井先生が言われているように、ほかの各市民レベルや、ほかの学者、大学の先生や、あるいはさまざまな運動と連帯してやっていくという考えはどう考えられているのか、ちょっと質問したいんですが。

○広瀬 一応ここは分会とか、組合の大会の場ではないんですけれども。組合がこれから消滅してしまふという問題はひとまず置きまして、いわゆる定員内不合格はやめるべきだとなると、いわゆる学力が余り高くない子どもも入ってくる可能性がある。そうすると、高校生の先生にしてみれば、勉強だけではなくて、いろんな生活指導の面でも負担がふえる。そこが一つ問題ではないかということですね。

それからもう一点は、定員内合格をやめることと格差の解消がどういうふうにつながってくるのかという質問だったと思います。

それでは竹田さんの方でいいですか。では、お願いします。

○竹田 この問題は本当は私が答えるより、高教組以外の人からの意見を聞いた方がいいんですね。

高教組の中では、これは毎回やり合う議論ですから、それをここで皆さんに聞いてもらってもしょうがないんで、この問題をどう、今現場の先生がそう言って、私ら執行部の提起もこうあったというのを、ほかの組織の人なり、ほかの市民の人たちがそれをどう受けとめるかというのを、私としてはちよっと逆に聞きたいですね。

一応私に対する質問がありましたから答えませけれども、私が言ったのは、格差解消のきっかけをどうつくっていくかと。そうすると、学校間格差をなくせと。中学区総合選抜制にせよというのは、これははっきり言って時間がかかるんですよ。そうすると、そこへ到達する第一歩として我々ができるのは何なのかと。

制度を変えるというのは、これは行政なり、その他のもろもろの力を動かすということが必要ですから、我々自身ができる第一歩は何なのかと言えば、それは定員内不合格を出さない。特に今保土ヶ谷が課題集中校であるかどうかは別にして、特に川崎、横浜北部等、いわゆる進学校と言われているところが、東京の私学に子どもたちが行くということで、定員割れするというのが過去あったわけです。

そういうところでも定員内不合格を出しているわけですね。それは成績順に並べてみて、離れちゃった子ですね。偏差値で言えばマイナスが出てきちゃう偏差値なんていうのが考えられないけれどもあるわけですね。そういう子を落としていくわけでしょう。そういう子が入っていけば、この学校はこういうランクというところに風穴をあけることができるじゃないか。そしてスライスされた、学力で言うならば、これは成績ですけれども、入試学力でスライスされた形で言うならば、まざった状態というのを、我々自身がつくれるじゃないか。そういう中から学校間格差というものの幻想を打ち破っていく我々の実践としてできるじゃないかというのが、うちの提起ね。

これを私たち自身は組合の運動でやろうと。運動でね、できるんだから。それを制度として求めていくかどうかというのは、いろんなまた団体の人たちとやっていくというのがありますよ。例えば東京だとか、それから総合選抜制をやっているところなんていうのは、定員内不合格なんていうのはあり得ないわけね。もうこれはその定員を全部埋めちゃうんだから。定員というのは何なのかというと、適格者じゃないんですよ。これは大会のやりとりになっちゃうかな。

定員というのは、行政がこれだけの子どもたちの教育を保障しますと、財政的にもね。保障しますと言つて、県民に宣言した数なんです。そしたら公教育の場合には、それは最低守ろうじゃないかというの、これは当たり前姿としていけるのではないか。その上で我々にさらに苦勞をかけるのかと。苦勞をかけて、そんな組合の方針ならやめちゃうと。それは組合の弱さだから、私らとしてはそこは克服していく努力を当然しなきゃならないし、「日の丸」「君が代」で組合が組織問題になっちゃうというのは、これはちょっと闘い方がどうかというふうに私自身思いますから、それはまた別途の問題として、定員内不合格についてはそう思う。ぜひそこはほかの人たちの意見をちょっと聞かせてもらいたいというふうに思います。

○広瀬 学校間格差や序列をなくすには、やはり学区の問題、つまり総合選抜方式というやり方をとらなければいけないのですが、これはなかなかすぐに実現できないわけですね。そのワンステップというか、中間段階の方法として定員内不合格を出さないという運動から始めようということだと思います。

定員内不合格をやめようということになると、教員の負担がふえるという問題に関しては竹田さんはどうですか。

○竹田 子どもたちがどこでどういうふうに教師に負担をかけるかというのは、これは我々の方で選

べないんですよ。教職員というものはね。それだって我々の仕事として存在しているわけだから、だから、そこにいる子どもたちを、我々はそれはあるときにはドロップアウトさせなければならぬという事態も、これも全面的に否定はできないけれども、しかし、それは最大限抱え込んでいかなければ、これは公教育である以上しようがないですよ。これはしようがないというふうに私は思いますよ。手のかかるというか方というのは、これは何もいわゆる課題集中校だけではないんですよ、決してね。私らとしてはそこについては、確かにそういう事務的な量も含めて、教育的なさまざまな課題を含めて、手間暇かかっていくわけだから、そういう点で言うならば、そこは人の数をふやそうとか、そういう運動をしてきているわけ。じゃというんで、簡単に切っちゃうかという答えにはならないだろうというふうに思います。

○広瀬 教員の負担の問題について、フロアの方から何か、特に高校の先生の方から賛成意見なり、あるいは反対意見があれば出していただきたいと思います。あるいは定員内不合格をやめようという運動について何かほかの立場からの意見みたいなのがあれば。

○——（三崎高教諭） 三崎高校なんですけれども、今の定員不合格については出さない方向で当然やるべきだというふうに私は思っています。ことしというか、昨年転勤したので、私もまだまだ状況がわからないんですが、理念的には正しいというふうに思いますね。

ただ、そういう中で、現実はどういうところの学校の先生が疲れてしまっているというのが事実ですね。つまり、何とかしようと。そういう子を抱えながら、先ほど「抱える」という話がありました。抱えながら何とか高校教育を変えていこう。小学区なり、中学区に向けて頑張ろうというふうに私なんかは思っていますけれども、現実には生徒を見ると、非常に疲れるというよりも、はつきり言ったら、自分が死んでしまうというか、授業中ポケベルが突然鳴るとか、それから机の上にお菓子が置いてあ

るとか、ジュースが置いてあるとか、ちょっと注意すると、こちらが怒られる。「うるせえ」ということを言われるわけですね。

すべての子がそういうことじゃないですが、もちろんいい子もいますけれども、現実にはそういう子の中には、私が教えたことし三年生の子はそういう子がおりましたね。そうすると、現場の教師がめげちゃうんですね。それでもって私たち小集団ということで、一クラスを二クラスに分けたり、三クラスに分けてやろうというふうに思っ、それでもって元氣になっていこうというふうに私たちは要求しているんですけれども、現実には行政は、きのう施設課と私は交渉したんですけれども、現場に来て、教室を二つに分けて二十人ぐらいで授業ができる教室をといて話をしたんですけれども、これはできません。十％シーリングがあつて予算がないと。講師時間についても何とか持ち時間数を減らしてやろうと思つても「そういうのはだめです」ということで、はつきり言つたら、きょういろいろ話がされて、非常にいい話だと私は思うんですけれども、現実には人もつけず、金もつけず、そしてこういうことをやろうと言つたつて、現場の教員は信用しないですよ。自分だけ苦労しなくてはいけないんですからね。

だから、私は思うんですけれども、そこはかなり教育運動というか、もちろん先ほど言われた組合運動も大事だと思う。ただ、そういう教育運動としてももう少し人もつけ、金もつけ、三十五人学級なり、そういうものを含めて何とかつけてもらわないと、現場の教師というのは早く出ようとか、結局そういう状況になってしまうので、私は思うんですが、きょうの提言、全くだと思つてますが、しかし、そういう運動も私たちやっていかないと、理念だけではもう現実には変わらないというふうに思っています。

以上です。

○広瀬 理念としてはわかるけれども、現場の先生は大変苦勞して、もう消耗してしまっているということだと思えます。多様な子どもたちが入ってきますと、先生の方も教えづらいという面があると思います。

そういう現場の教師の困難さというのはどこの高校でも多分起きていると思います。それについて保護者というか、親の立場から寛さん、何か一言あれば、お願いします。

○寛 先ほどの先生がおっしゃっていた、そういう子どもが入ってくると教師は疲れるというふうなことを聞きましたときに、非常にひっかりました。中学校の先生はそういうことをいつもやっているのに、高校の先生はそういうことをやらないのか。やればいいじゃない、というのが私の思いです。それは教育の原則だと思いますが。

それともう一つは、三崎の先生がおっしゃっていましたが、親たちを引っ張り出すということが一つの方法じゃないかと思うんですね。先生と生徒だけの闘いというものを先生は親に言いたがらないんですよね、いい格好して。でもね、先生と生徒の闘いを親にぶっちゃけて言っしてほしい。親は一〇〇%の親が必ずしも出られるとは思いませんが、力をかしたいけれども、先生が全然胸襟を開いてくれないから、どこからとつかかっていったらいいのかわからないという親たちが喜んで参加すれば、子どもというのは変わっていくんじゃないかなと思うんですけれども、それも一つの試しだと思います。

○黒沢 教師以外に教える人はいないでしょうか。

私の授業ですと、社会教育という特殊性があるのかもしれませんが、識字教育なんて私より知っている人が沢山いるわけです。例えば横浜で大沢さんというすごい人がいます。そういう人を呼んできたり、公民館の職員を呼んできたり、私なんかよりずっとおもしろい話をしてくれるし、安い

謝金で恐縮しているんですが喜んでやってくれるんですよ。そういう人ばかりに頼ってはいけませんし、そういうことをやると、臨教審路線に乗っちゃうというふうに言われちゃうかもしれませんけれども、やっぱり地域社会に、高齢化社会になっていきますから、いろんな技術やノウハウを持っている人がいるわけですよ。そういう人々の協力を求めたいかがでしょうか。

高等学校の先生は、どうも自分たちだけでやるといふうに頑張っちゃうですね。もちろん条件闘争をやっていくことに私は大賛成でし、それはやらなきゃいけないんですけれども、それと併行に学校外の人々の協力の可能性はありませんですかね。

ですから、私は、結構「手配師」みたいなところがあるんですよ。いろんな地域社会に行っている人を見つけてきて、そういう人々に話してもらって、私も勉強になりますし、生徒も喜んでますよ。私の話なんかを聞いて眠っている学生も、そういう人々が来て話してくれば、非常に迫力があるわけですからね。しかし、こっちも給料をもらっているわけですから、ちょっとコメントめいたことをやらなきゃいけないのでやりますけれども、とにかく非常に勉強になるんですよ。

そういう可能性はないですか。学校を軽くしろというのはそういう意味なんですよ。

できれば単位の認定までも現場に任せたらどうでしょうか。それであとそれを形式的に承認していったらどうですか。学生も、生徒も喜ぶし、そういう可能性はないでしょうかね。私、課題集中校の先生にちよっと聞いたら、「いや、生徒は学校では非常にやる気がないけれども、そういうところに出ていけば非常にはりきってやる生徒がかなりいますよ」ということでした。そういうことをやったらどうですか。あと必要なところだけは学校でやればいいんじゃないですかね。そういう可能性はないですか。

○広瀬 質問なさった方どうですか、そういう可能性について何か簡単でいいですから、話してみ

下さい。

○——（三崎高教諭）　そういう努力はしているんですけども、我々、教育課程の中でも来年度から、例えば三浦半島再発見という講座をつくって、例えばそういう中で地域に出ていこうというふうなことで、十人ぐらいの生徒を二人の教師が教えるとか、例えば水産業だとか、現場の問題とか、いろんな人に聞いていこうということをやっています。

だけど、そういうふうな前にやっぱり疲れてしまうというのが現実にあるんです。だから、それは全くやっていないということではなくて、具体的には取り組んでやっています。

○広瀬　寛さんと黒沢さんの意見は、教師が一人で全部背負ってしまうのではなくて、親とか、あるいは地域の人たちにも参加してもらったかどうかということですね。寛さんが「やりなさい」と力強くおっしゃっていましたけれども。

これまで定員内不合格の問題、あるいは格差の問題について話してきました。別の何かテーマでもってご意見ありましたらお願いします。

○——（保護者）　高校生と二十歳になる子どもを持つておる親でございます。そのほかに神奈川県教育を守る会という会がございまして、三十九年の歴史のある中の一員でもあるんですけども、今、お話をいろいろ伺っていて、フツと「教育って何のためなの」ということが私のメモに書いてあります。職業につくためでしょうか。そうではないんじゃないか。

今、生涯教育ということであっちこっち、この前宇都宮大学の、お名前を忘れました、何とかという助教授も話していましたけれども、十五歳、十八歳、高校生、大学生になるという考えを捨てることから今の世の中は始まった方がいいんじゃないか。先生方も十五歳の高校生をそろえようと思うから、しんどいと思う。この中に十八歳の高校一年生がいたら、しんどさというのは当たり前になるん

じゃないか。だからといって高校の先生方にしんどさを私は強要しているわけじゃありません。

ただ、教育ってやっぱり生きるために、命がある限り生きる。そのための一つの手段としてまた夢があつて、幅があるものとして職業や生き方があるんだと私は思っています。私は病人として生まれ、病人として生きてきましたので、治療しなくてはいけない困難さを抱えながら生きていますから、もうちょっと幅を広げていただきたい。

それと、まず現状を受け入れて、つまり、高校入試ということ、あるんですね。それを受けながら私は二人の娘を育ててきました。二人とも受験期で悲しいとか、つらいとか思ったことはありません。つらい思いをするのは娘たちでいいんです。親はつらくなくなつていい。もちろんそれまで段階を踏んできました。突き放すためには。そういうことを今少し先生方も、世の中も子どもたちに親切な路線をしき過ぎているような気がしてなりません。泣くのも生きるバネじゃないかと思っておりますので。

そこでちょっと質問なんですけれども、私はここ三年間で二十歳になります長女の友だちを三つのパターンで亡くしました。部活中の事故、非常にいまだに、きょうはその学災連の総会で話けれども、こちらの方で何か将来的な模索が自分の中で見出せるのではないかと思つて、そちらをけつてこちらに参加しましたので、どうしても欲しいものがありまして、ご質問させていただきたいんですけれども、子どもたちが高校中退するのは自分の選んだ進路じゃないから。じゃ、選ぶような進路を努力させたかということを、中学校の先生方、それと同時に親が反省すべきことじゃないかと私は思います。

中退した連中をたくさん知っていますし、きいています。でも、そんなに悲しんでいません。ただ、生徒として中退した人がもう一回入れる制度をもう少しここで考えていただかないというふうには



思っています。

それともう一つは、先ほどの高校のクラスの人数なんですけれども、四十人を見ようとするから大変なんであって、今、高校生も含めてクラスの人数を減らすという運動をもっと具体的にしていた方がいいでしょうか。三十人、そういうことをあれすると、もうちょっと、もちろん格差を減らさなくてはいけませんけれども、そういうことの具体的な運動は竹田先生の方に伺いたいんですけども、どうなっているんでしょうか。

定員内不合格者を出さない。私、これは大賛成です。当面のやれることとしてやれると思います。このためには多分八十単位で卒業させると、先生方の職業がちよっと危なくなるんじゃないかという危惧もある。それが何といっても高校、今受験がある以上は、私は教育を守る会として、横須賀支部は非常に、また三教組もとても協力をしてくださいますので、一緒になって高校はどこに入るかじゃなくて、何を学ぶかだということを親がもうちょっと納得しよう。現実には受験があるのだからということで、

ここ十年学習会をやってまいりまして、大分根づいてまいりました。そういうことは親たちはしています。

それから寛さんがおっしゃってくださった、高校の先生方、もうちょっと問題を親に投げかけてくれ。私は高校で三年間やってまいりました。見事に先生方は乗ってくれました。もう一年間で集大成としてやれると思ったら、実は県立初声高校の死亡事故でございまして、そちらの方にかかりつきりで、先生方とはその直接、先生方のしんどさを吸い取って差し上げることはできませんでしたけれども、しかし、寛さん、高校の教師はどうか、学校は閉鎖的です。とても大変です。でも、できます。ですから、先生方も、もうちょっと問題を親に投げかけてくださいじゃなくて、親が食い込んでいくべきだと思っし、ただし、先生方を責めてはいけないと思います。大変です。本当にね、困難校は大変だと思います。そうじゃない学校も大変でございましょうが、私は、先生方も、親ももう少し輝いて、子どもに不自由をさせたいと思っております。

ですから、今のところ、あとは浅井先生にお伺いしたいんですけれども、中・高が反目しあってもしょうがない。もつと話し合うべきだ。具体的に県立高校の教師とのどのような話し合いを持っていられっしゃるのか。伺いたいと思います。

長くなってすみません。

○広瀬 いろいろな問題がたくさん出ました。一つは、今の教育のあり方、高校のあり方をもう少し柔軟にしたらいのではないか。中退した子どもにも再度機会を与えてあげたらどうか。この子どもの中退問題についてどう思うかというような質問でした。

それからもう一つは、クラス人数を減らす運動、これはどうなっているかということですね。

あとは中学校の教師と高校の教師との間のコミュニケーションですか、話し合いみたいなものはど

うなっているか。

シンポジストで答えられる方、浅井さんですか。

○浅井 今、私への質問もありましたので、それも含めてちょっとお話をしたいと思うんですが、先ほどの定員内不合格の問題ということで言えば、私の方で問題を提起させていただいた中がかかわってくるんですが、制度改革をどうしていくか。小学区制なり、総合選抜制にどう持っていくかというのは、これは組織として強力に運動を進めいく課題だと考えています。それが一方だというふうな思っています。

ですから、制度改革を待つてから何かじゃなくて、それを促していくもう一方は、自分たち自身がやっぱり厳しい中でやっていかなければいけない課題だろうというふうに思うわけです。それが例えば今高校では組織挙げて定員内不合格を出さないようにしよう。これは高校だからできる課題だと思います。

逆に義務制の方で言えば、どうやって地域の高校に子どもたちを送っていくか。遠くに行かさないで、地元の高校を地元の中学でつくっていくか。これが義務制の課題だというふうに思います。これはどっちも、私どもの方でもこれについては大変論議もありますし、そんなにうまくいっているわけじゃありません。でもそれを義務制は義務制で、高校は高校でお互いが自分でやれるところは何かということをやっていくことが、少しずつでも変わっていくんじゃないかなというふうに思います。

一つは、その中でもどうしても必要なのは中・高の連携だというふうに言いつつ、今も質問があったんですが、具体的には組織としては教職員組合同士で研究会を定期的に三浦半島では持っています。これは高校の先生方の組織と、私ども義務制の方の教師の組織と、これは組織同士で定期的に持ってきています。これは十数年続いている組織です。

それから学校同士ということで言えば、中学校というのは、子どもたち、生徒たちにどういう高校かということを紹介するために高校に対する説明会つてよくやるんですね。そこがここ二年間の中で地元の高校の先生を呼んでください。遠い学校の先生を呼んで紹介してもらっても、それでは何にもならないから、自分たちの地域の高校、三校指定がせっかくあるわけですから、その地域の高校三校の先生に来ていただいて、子どもたちで学年集会なり、話をしてもらって、高校の説明をしてくださいと。

それから逆に、これはまた高校の先生の方にお願ひになるんですが、積極的に地域の中学校に行っていたら、それは今部活動という形での交流というのが行われてきているんですが、そういう形だけじゃなくて、さまざまな課題で、例えば教職員同士で飲み会をやってもいいというふうに、私はそういうところで始まるんだろうと思っているんですが、そういうところから始めようじゃないかという形で、少しずつではあっても、地域の中学と、地域の高校でお互いの一つのネットをつくっていくということが大事になっていくんではないかなと。また、その一步が今始められているところだと思います。

ただ、これを全県的にどう広げ、地域の高校へ進学しようという運動も、全県的な形ではまだまだなり得てないという現状がありますから、全県的にどう広めて、神奈川のをどう考えていくのかということがまだまだ大きな課題として残っているんじゃないかなというふうに思います。

○広瀬 よろしいですか。

それでは、ほかに何かご質問なり、ご意見があれば手を挙げていただきたいと思います。

○——（教諭） 質問になるか、意見になるか、ちょっとわからないですけれども、先ほどから四人のシンポジストの方の話を聞いていて、いろんなところでいろんなふうに言いたいと思うんですけ

れども、それこそ口がうまくないので、どのように絡ませていいのか、ちよつとわからないんですけれども、私、きょうここに来た理由というのは、私、教員なんですけれども、ピラを見て、「高校教育の現在と未来を問う」という題で、神奈川の入試制度をめぐってなんていう題で、今一番興味のあるところなんで来たんです。その教育の未来ということについて、フツと今話を聞きながら思ったんですけれども、今私は鎌倉市の教員ですけれども、藤沢市の住民でもあるわけです。

今、藤沢市で老人問題が非常に進んでいる市だそうです。新しく老人ホームが今度できるといふ、その前の設計図を見た人の話を聞いたんですけれども、この老人ホームは痴呆症の老人も収容できるように、例えば徘徊老人なんかもそこで徘徊をしながら生活できる。そういう設計がしてあるそうですね。

その徘徊ができるようにというのは、うろろろするので、うろろろできるように行きどまりにならないように円い道がホームの中にできていて、そこに老人を、徘徊老人を収容する。そういう案が出ていたそうですね。

私、その話を聞いて、この話について見方とか、考え方とか、感じ方というのはすごくいっぱいあると思うんですけれども、教育の未来というのが、そういう形に集約されていくのかな。いろんな立場の人が、いろんなところで、神奈川は特にそうですけれども、労働組合とか、それから黒沢先生みたいな学識経験者とか、それから一般の父母の声とかというのを行政がいろいろ取り込んで、いろんなものを進めていますよね。

そういう中で私が見えてくる教育の未来というのが、どうも徘徊してもよい老人ホームというのかな、そういうところにフツと重なりあっちゃうような気がしたんですね。それが一つ。そういう気がしたんです。

それからもう一つは、ずっと臨教審以来、中曾根さんというのは私はすごく頭がいいと思うんですけれども、今、つまり、私たちがこういう場で教育改革とか、教育について語らなければならないような場をつくってしまった。総ぐるみでみんな教育について、みんながああだのこうだのと言ってしまふ世の中をつくったことが、つまり、臨教審のねらいだったんじゃないかなというふうに、フツとそういうふうな二点目に思っています。

それは教育改革の話をしていると、だれもが何か制度を変えられるような幻想を持ってしまうんじゃないか。

今、四人の方も制度の話が多かったんですけれども、父母の運動にしろ、何にしろ、何か制度を変えてよい制度ができているんじゃないかという幻想に陥ってしまうんじゃないかな。私も含めてそうなんですけれども。そういうときに現実に今のこういう現状の中で生きていて、そのありのままの姿を認めてもらえない存在。そういうのが弱者だとか、いろんな言い方をされちゃうんですけれども、そういう人がそういう話では不都合があるということで異議申し立てをしているのが、一つは、先ほだから発言があったんですけれども、いわゆる障害と言われている子の高校入学なんですね。

だから、そこでもいろいろ制度改革の問題とか、高校現場の教師の問題だとか、それはすごくわかるんですよ。だけど、わかっていたら、ただその場でみんなと一緒に生きていくことができない子が異議申し立てをしているというのが、その問題につながって、だから、制度改革なんかのいろんな運動をやっていくときに、制度改革をすればいいんじゃないかと幻想を持っていく運動のやり方というのは、私はちょっと疑問を持っています。

それから三番目に言いたいことは、もう一つは、じゃ、どうしたらいいのかというと、今私たちが生活しているその場で、例えば高校の先生が、さっきすごく大変だとおっしゃったんですけれども、

その先生は自分の生活というのもあって、仕事でやっている部分と、自分の生活があって、そんなに仕事の部分で苦しまなくたっていいんじゃないのというような、そういう人がもう今複雑な世の中ですから、一人で何役もやってるわけですから、そういうのをトータルひくくめた自分の生き方みたいなところで出会った問題を一つ一つ、一人一人がそれぞれの立場できちんと考えていく。そういう進め方をしないと、非常に無責任な発言が、私、黒沢先生に特に思ったんですけれども、非常にこちらで聞いていてイライラしてしまうというか、そんなこと言ってもらったら困りますというような発言があるんですけれども、やっぱり私たちは今いろんな差別もしているし、差別もされているような立場にいるわけで、そういうところをきちんと見つめた上で運動を進めていかないと本当に怖い。つまり、中曾根のもくろみに乗っかってしまうんじゃないかなと。

以上三点感じたりしたことをちょっと言ってみました。

○広瀬 特に質問という形ではないのですが、制度改革をすれば、何でも解決してしまうというのは一つの幻想ではないか。そういう幻想は持つなことですね。

もう一つ、差別の問題について黒沢さんに対する違和感みたいなのを表明されました。今のことに関して黒沢さんの方で何かあれば。

○黒沢 そういうふうに受け取られたのかなという感じですけれども、私も制度を変えらればうまくいくというふうには必ずしも思っていないんですよ。

寛さんの話の中で大学を変えれば、という話が議論の中に出てこなかったもんで、ちょっと私の感想を今の話とからめて言いますと、私も確かに大学をやっぱり変えなきゃ教育が変わっていかないだろうというふうに思っています。大学間には格差が非常にあって、これを変えない限りなかなか直らないだろうという思いはあるんですね。

以前社会党でシャード内閣なんていうのをつくるといので、一つの政策の草案をつくってくれといわれて、私は大学改革のことを担当したわけです。今それを全部紹介する時間はありませんけれどもほんの一部を申し上げます。全国の国立大学を、国立総合大学にしてできるだけ格差をなくす。教員の方も東大の教授を十年やったら鹿児島大学へ行って十年やるとか、そういう異動をして格差をなくしていくことを強制的にやる。

そのかわり旧帝大の大学院は連合大学院にして、そしてブロックごとに研究施設をつくる。大まかに言うと、そういう案をつくって、もしこういうふうにいけばなかなかおもしろいと思ったんですね。しかし、それはつくっただけでどうやったらできるかとなると、権力も何もないわけで、もし政権を取ったらという話になっちゃうんで非常に虚しいんですね。

それをつくった代議士に先日会って、「どうしましたか」とたずねましたら、「ああ、そんなこともありましたな」という話になっちゃったんですね。これは政権と直接関わる臨教審や中教審の場合と違うところだなと無念に思ったわけです。

ですから、先ほど言ったように、差し当たって、中規模の総合選抜制ができればいいというふうに思いますけれども、それを展望しながら、しかしそれができるまでは何にもしないというわけにいきませんから、差し当たって中・高一貫制へ向けて、地元集中受験というような形で運動をすすめる。この運動は大阪なんかでは歴史と実績があつて、これによって中退者がかなり少なくなっています。そういう実績なんかをみんなで共有し合いながら運動を進めていくことが必要です。そういうときに高等学校の先生の適格者主義というのはかなり問題になっていくんじゃないかと思えます。私としては、大学の方からトップダウン式に改革していくんじゃないかと、中学の方から高校へ迫っていくような、そういう運動を起こすことによって、さっき言った制度の改革ができる前に一つの改革的

な要素はあるんじゃないだろうかと思います。

さつき竹田さんが言われた、定員内不合格者を出さないという、それも一つのステップだろうと思います。それから先ほど三崎の先生がおっしゃったような、いろんな条件が整うのを待っているというか、それがなきゃできないという前に、まずそういう可能性としてそういうものを運動として起こしていくことが必要ではないだろうかということを私は申し上げたいのです。制度を変えられると考え、それをもてあそんでいるというような気持ちは主観的にはないんですね。

それから臨教審で中曽根氏がそういうふうに言ったということは、我々が大いに議論して、できることをやっていくという場をつくってくれたと捉えれば、それは一つの反面教師ですから、逆手にとって大いにやったらどうかと私は思います。

○広瀬 大分時間が過ぎてしまいました。

最後にどうしてもこれだけは言いたいという方があれば挙手をお願いします。では、前の方お願いします。

○沢（保護者） 私、三浦に住んでいる沢と申します。教員でも何でもない建設現場に勤めている者なんですけれども、意見じゃないんですけれども、感じたことだけお話しさせていただきます。

一つは、黒沢先生がレジユメの中で書いてあるノンエリートの自立、これは非常に大切で、私も興味深く聞かせてもらいました。

やはり批判的検討というんですかね、そういうものがない限り、確かに私もエリート集団というのは必要だと思うんですけれども、それだけじゃなくて、ノンエリートの自立。要するに選択、どういうときに何を一番選択しなければならぬかという批判的な面ですね。そういうものが私は一番大事なことじゃないかなと思って、大変私自身参考になりました。

それからあと、これは私の考え方なんですけれども、先ほど来、いろんな方の、先生のご意見とか、聞いていますと、申しわけないんですけれども、ちょっと枠にはまり過ぎられているんじゃないのかなという気がするんです。先ほどなたか女性の方が病院の生活のこともお話しされていますけれども、まさに病院の生活とか、そういうのが日常生活のレベルなんですよね。

教育は別に高いところの次元云々というよりも、そういった日常生活の目のところをもう少し素直な目というんですかね、素直なそういういたものというのは、私はちょっと申しわけないんですけれども、何かを得たいなと思って、きょう来させていたいたんですけれども、そういうのもちょっと残念だったかなというのがあった。

といいますのは、今の教育というのは、数学にしても、英語にしても覚えるというのが確かに中心になっっているかもわかりませんが、優しいだとか、思いやりがあるだとか、素直な子だとか、よく手伝いができるだとか、そういう評価の枠組という



んですかね、それが日本の社会というのはどうしても私はできていないような気がするんですね。ですから、もう少し評価の枠組の考え方というか、体系づけをすれば、授業中に飛行機を飛ばすとか、お菓子を云々という話、確かによくわかるんです。わかるんですけれども、評価の体系を、何というですか、算数、英語とか、そういうものができる子がいい子だと、優秀な子なんだという、そういった、これは親の立場も悪いんですけれども、社会全体がそういう目をもう少し、広い意味での評価体系の方法を日本全体がつくらない限りは、なかなか、今その看板に出ているような「現在と未来を問う」ということ、未来がなかなか私は出てこないんじゃないかなという気がしました。

以上です。

○広瀬 意見ということでしょうか。

あとほかに誰かいませんか。それでは後ろの方お願いします。

○小野寺（保土ヶ谷高教諭） 先ほどから舌足らずで申しわけないんですが、今、状況というのは非常に恐ろしい状況にきていると思うんですよ。ここで本当に何かしないと、今の現状では定員内不合格者を出さないというのは確かにわかります、それは。それは第一歩だと思うんですが、それをやっている、もう組織は立ち行かないところに来ているような感じがします。余りこういうところで言っちゃいけないと思うんですが。

本来、人権といものを守るには、ちょっとした労働権的なことを言ったり、一応私は人権同和を担当していますので、人権的な発言をすると、高校教員はもうそういう教員自体がちょっと組合的だからということで排除するような考え方が非常にふえてきています。現状としては蔓延しつつあります。学校教育の中で教員自体が自分たちがエリート化してきて、少しでもいい学校に次の人事でいこうということを持っているんですよ。そういうようなことでうちの校長などはそれを使って、人事を使

って脅す。それで「分会なんかで一生懸命やっているといいところに行けないよ」なんていうようなやり方をして脅かすというような状況が現状で起こっています。もう本当に非常に危ない状況にあります。そのところを人権とか、そういう視点を持ってやっていかないと、もう高校教育そのものが格差を生み出す選別装置になってしまうというようなすごい恐怖感があります。

もう実際今入選で動いているんですけれども、私は分会の方で役員ではないんですが、分会的な発想を持っているんで、組合員の発想を持っているんで、入選からつまはじきにされて、どういう入選が行われているのか全くわかりません。そういう状況にもう来ているんですよ。

こういう状況をそのまま放置しておけば、必ずわけのわからないところでいつの間にかコース制、コース制から総合科、そういうものがくれば、学校間格差、普通科、総合科、体験講習ですね。コース制とはどういうものか聞いたんですが、県の方では、コース制というのは総合科にかわるものではないというような考え方で言っていましたけれども、恐らくニュアンスではコース制がどんどん導入される中で、そういう中から総合科というものが導入されて、学校間格差というのはずっと続くんじゃないか。そういう中で教員はどんどん蹂躪していくような発想、差別主義的発想というものを持っていつてしまうのではないかと思います。

○広瀬 わかりました。

○小野寺（保土ヶ谷高教諭） そのところをもうちよつと、竹田書記長と言って申しわけないんですけれども、考えないと本当に。終わった後で竹田さんともう一度詳しくお話し

○広瀬 分会というか組合が危ないということです。終わった後で竹田さんともう一度詳しくお話ししてください。

それでは最後に一言、前の方で終わりにします。

〇——一言ということで、「高校教育の現在と未来を問う」という題を改めて見まして、過去・現在、高校に入っていない子どもたちをどうしていくかということを考えない限り、未来はないと思うんですね。

先生が大変だとか、何が大変だとか、いろいろあるけれども、現実に本当に生きている子どもたちをどうするのか。高校に行きたいけれども、過去・現在、全く入っていない子どもをどうするのかということを考えない限り未来はないと思います。

ま と め

〇広瀬 大分長くなりました。もう少し時間がとれば、いろんな方にもっと自分の思いみたいなものを話してもらうことができたんじゃないかと思います。

きょうのシンポジウムを通してわかったことは高校の現場では格差と序列というものが現実に存在して、それがさまざまな問題を生み出している。一挙にそれは解決できないけれども、できることから、手のつけられるところからやっていくことが重要であるということです。

ただし制度を改革すれば、何でも解決するというような幻想は抱かない方がいい。むしろ現実における差別の問題を普通のふだんの目で見えていく。そういう視線が必要ではないかということです。

それからあと教師の負担の問題、つまり労働負担の問題をどのように考えるかということもこれらの課題になってくると思います。

きょうは長い間、いろいろと話し合いができました。有意義であつたかどうかはわかりませんけれ

ども、一応これで終わりにしたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 もう少し時間をいただきましたと思います。

最初に自己紹介しなかったんですけれども、研究所の事務局長の谷口といいます。

実はきのう、電話の問い合わせがありまして、この会にどうしても来たいんだけど、どうも公務で行けそうもない。この内容というのは後日何か記録になって出るんでしょうか、という話がありました。私どもでは第一回、不登校をめぐるシンポジウムをやりまして、きちんとテープおこしをして冊子をつくっております。第二回目もうじきできます。うちの研究所は義務制ですから、小・中の先生にはいくんですけれども、今回のシンポジウムの記録はぜひ高校の方にも、それから問い合わせがあればあなたにでも送りたいと思いますので、そのようにお願いしたいと思います。

それと最後に、感想記入用紙が皆さんの手元にあると思いますが、ぜひこれに、きょう話したかったけれども手が挙がらなかったという方は感想を書いてほしいと思います。感想もブックレットの方に一緒に入っていきますので、よろしく願います。

それからシンポジウムの第四回、第五回は何をやるのかまだわかりません。不登校に関する要求、要望が多いものですから、パート3をやるかもしれないし、きょうのこの高校の問題についてもきょうが始まりだと思っておりますので、また検討して二回目、三回目と行うことがあるかもしれませんので、ぜひその折にはご参加をお願いしたいと思います。

最後に、壇上にいるシンポジストの四名の方、それからコーディネーターの広瀬さんに再度の大きな拍手をお願いします。(拍手) ありがとうございます。

では、小中副所長が閉会のあいさつを申し上げます。

閉会の言葉

○小中副所長 土曜日の午後、大変お忙しい中を本日この第三回の教育シンポジウムにご出席をいただきまして、本当にありがとうございました。

約百五十人の方にきょうはご参加をいただきました。おかげさまで多くの方々からさまざまな意見、あるいはお考えをいただきました。こういったことを我々も受けとめながら、今後の運動、あるいは日常の教育実践の中に生かしてまいりたいと、こんなふうに思っております。

本日、コーディネーターを務めていただきました広瀬さん、また、シンポジストを務めていただきました四人の方々、本当にありがとうございました。

以上をもちまして第三回の教育シンポジウムを閉会とさせていただきます。

どうも本当にありがとうございました。(拍手)

—閉会—

参加者感想文

☒ 親と教師ががっちり手を組んでいけるといいですね。いろいろ勉強になりました。

☒ 先生という職は人を相手の職業だということを充分考えてほしいなと思いました。大変な職業でしょうが、ぜひがんばってほしいと思いました。また、地域の人々とのつながりをぜひつくるように思いました。何も先生だけで悩む必要はないです。

☒ ・「先生たちの負担」ということを改めて考えさせられて、格差について、高校には格差があってもよいのではないかと思いました。もう個々の生徒の学力、時には思考力、意欲の差は明らかに、平等という名の不平等を強いるのは疑問でした。

・高校生の娘は、中学の時より話が合う人が多くて、喜んでいます。

☒ ・入試の性格が、振り落としを目的としていることからすれば、やはり入試選抜そのものを変える必要がある。ア・テストを残すと明言される中で、どう総合選抜制を注入していくかが期待される。今日の議論がとても良かったので、又新しい年度に引き続いてやって欲しいと思います。

・障害児の部分では、高校の特学についてよく話しているが、いろいろな方面から聞えればありがたいし、進めてみたい。

☒ ・シンポジストが、もう少しいろいろな角度から考えて、体験して、その上でご自分の主張をしていただきたいと思います。（ごめんなさい）

・黒沢先生への批判は、発表の時間が短く少ないからだと思う。四人の中では一番体験経験をした上での現状の出来ることを出来ることからとの発表になったと思う。素晴らしかったのに……。黒沢先生の話をもっ

とものと聞きたいと存じます。エリートとノンエリートの論理、頑張つて実践して下さい。私達も自立したい。

- ・ 高校の先生ごろうさまですが、二十歳になった子たちの栄養になっていますことを分かってください。…と申し上げたい。

- ・ このようなシンポをたくさんやりましょう。(あえて、やって下さいとは言わない。)
- ・ ご一緒に、クラス人数減をやりましょう。

- ・ 広瀬先生、名コーディネーターでした。ありがとう存じました。(教育を守る会 稲森)

☒・『学習意欲や目的意識のない者は、高校へ行くべきではない。』との意見がアンケートの中にあったが、その通りだと考える。だからこそ、高校進学を本当に希望している子には、希望する高校へ入れるようにして欲しい。(希望者全入制)

- ・ 親達も、外見だけで高校へ行けというのではなく、もっと子供の本当の考えを受け入れ、考えていくべきである。(進路を決めるのは親でなく、教師でもなく、子供自身である)

- ・ 適格者主義は、子供達をゆがめているようではなかったが。子供達が、本当に何を求めているのかを、教師も良く知らなければならぬ。希望者全入制が子供達を甘やかすことではないと考える。
- ・ これから中学生になる子を持つ親として、これからの三年間をどのように過ごすか考えていかなければならない会となった。

☒ 小学校の教師で、中三、小六の子の母親です。何がどうなっているのかわからないまま、いろいろな会合に出させていただいています。そして感じることは、小・中・高の教師があるがままの姿を出しあつて、本音で語り合うこと、親としての気持ち、教師としての気持ちを正直に言い合うことだと思っています。お互いに、まず知り合い、わかりあつて、はじめてみんなでどうしたらいいのか語れると思います。小の教師でありながら、中・高のこと少しもみていないような気がしました。

☒・寛さんが言われた「教師と生徒とのたたかいを、親にぶちまければよい。」のことは、示唆を与えられた。

・会場は、県のまん中でできたら…。

☒・非常に勉強になりました。大学改革が問われている時、現場の声を聞こうと思ってきました。(大学関係です。)

・印象に残った発言。

① 十八歳大学、十五歳高校という考えをすてておくべきではないか。出たものがまた入りなおすことができないように。

② やさしい、すなお、思いやりがある…こういうことを教科学力のみでなく、広い評価の枠組をもちたい。

☒・内容は、ほぼ予想通り。発言者(参会者)からの質問も予想通り。

・副テーマ「入試制度等をめぐって」の「等」の方に流れたか？

・「入試制度」に期待して参加した。ア・テストも含め、いろいろな考えを聞いたり意見を述べようと思ったが、残念。

・話題として多くはあったが、これは教員・組合・団体レベル。

・一市民として、草の根的な制度について意見を聞きたかった。

・もっと、一般者向けのレベルでのシンポジウムもほしい。

☒・アチーブメントの是非を考えてほしい。

・入試一発勝負の方がよかったように思うが…。

☒・教育問題を考える時、以下の視点がクリアーされたらと思う。

① 教育を受ける自由、受けない自由の保障。(小学校より…)

② 教師側の単位の認定権の確立。

☒ ア・テストや選抜方式についてもっと突っ込んで欲しかったと思います。

☒ ・シンポジストのプリントの名前の順が気になりました。大学教授が先で、母親が最後に紹介された形の根拠は何なのでしょう。アイウエオ順ではないのでしょうか。壇上では、話の進行の關係で別でしたが…。

・進路指導にあたって、教師主導で行なわれすぎているのではないのでしょうか。指導より助言にとどめ、本人の決定にさせた方がよい。(中途退学者の数とからめて)

☒ 学校間格差の結果は、自然集団がうしなわれたことだと考えます。生徒が正常に育つ集団を、いかに回復するか、これから努力するしかない。(高校教員)

☒ ・今まで、高校は選抜制があるということに入れなかった子供達を、どうしていくかという事を考えていかなないと「問う」ことにならないと思います。

・「障害」のある子も高校に行けることを約束して下さい。
・高校教師の会場発言のひどさ。高校は差別的だと思います。

☒ 障害児の全日制高校入学を是非実現させて欲しい。

☒ 高校問題は「制度改革」ばかり論じられる。「制度」があるから、「制度」ができるまで…と、「制度」という言葉は聞きあきた。「制度」ということで、今まで「障害児」といわれる子どもは、ずっと切り捨てられてきた。

「障害児」といわれる子どもが高校に入れないのは「制度」があるからではない。希望者全入と「障害児」の高校入学の問題は違う。差別の問題だ。

まとめにかえて

一九九三年二月二七日、逗子市図書館ホールで「高校教育の現在と未来を問う―神奈川の入試制度等をめぐって―」公開シンポジウムが開催された。シンポジストには、中学校、高校、大学の各教員、さらに保護者の代表者を招き、それぞれの立場から高校問題に対する問題提起をしていただいた。後半では、フロアからの質疑応答も交えて、活発な論議がおこなわれた。

高校をめぐる最も大きな課題の一つは、「格差と序列」の問題である。シンポジウムにおいても、それをどのように突き崩していくかが、論点の一つになった。

進路公開のできる学級づくりをめざす浅井さんからは、子どもたちを地域の高校に進学させる運動の重要性が主張された。一方、受け入れる側に立つ竹田さんからは、定員内不合格者を出さない運動の必要性が強調された。送り出す側、受け入れる側とそれぞれ立場を異にするが、二人に共通するのは、制度改革を待つのではなく、現状で何ができるかを検討し、できることからまずは実践してみようという姿勢である。そういった地道な実践の積み重ねこそが、現実を変える大きな力になっていくと思われる。

中学三年生のお子さんの受験を通して高校問題に直面したという寛さんからは、今日の偏差値教育に対する問題提起がおこなわれた。偏差値教育の元凶は大学受験にあるとし、子どもたちを受験競争から救うには大学の入学を無試験にすべきだというのが、寛さんの主張である。その主張の現実性とはともかく、高校問題が大学問題と連動している以上、こうした観点からのとらえ直しもまた必要である。高校問題の背景に関する黒沢さんの指摘も興味深いものがあつた。業者テスト排除の動きがみられ

るが、はたして偏差値はなくなるのかといった問いかけから、企業社会と人材育成の問題、エリートとノンエリートの問題など多様な観点から独自の見解が明らかにされた。学校の負担をできるだけ軽くするという黒沢さんの持論には大いに共感する。

フロアからの注目すべき発言を二つ取り上げておきたい。一つは、高校の教師からの発言である。定員内不合格者を出さないという運動の理念は分かるが、学習意欲の低い子どもを入れたと教師は過重な労働を強いられることになるという指摘であった。理念とはそもそも人々に生きやすさをもたらすためのものであるが、逆に生きにくさをもたらしているとなれば、理念そのものに問題はないのか、それと同時に教師の教育労働という観点から運動のあり方を検討することも大切ではないかなど、いろいろと考えさせられた。

もう一つは、障害をもった子どもたちの高校進学をどう保障するかという、保護者からの問題提起である。これは、障害をもった子どもだけでなく、不登校や外国人労働者の子どもへの進学保障とも関連する、今日的課題であるといつてよい。おそらくこの問題は、高校とは何かという根底的な問いかけを含むものであり、具体的には適格者主義をどうとらえるかといったことがらにかかわる問題である。

短い時間のなかでのシンポジウムであったため、十分議論し尽くせなかった問題が多く残ったが、それらについては高校問題をテーマにしたシンポジウムを再度開催する予定なので、そこでまた改めて論議してみるのもよいだろう。

最後に今回のシンポジウムを開催するにあたって、多くの関係者のご協力とご援助をいただいたことに対し、深く感謝の意を表したい。

一九九三年六月一日

広瀬 隆雄

第三回教文研教育シンポジウム記録

高校教育の現在と未来を問う

—— 神奈川の入試制度等をめぐって ——

1993年 6 月 1 日

発 行：神奈川県教育文化研究所
横浜市西区藤棚町2-197
神奈川県教育会館内
☎ 045-241-3531

印 刷：(有)神奈川教育企画
☎ 045-253-3435

KYOBUNKEN